



鐘 が 淵

結城市上山川に、前法内ぜんぽううちという部落があります。この部落に、むかしから、いつたえられている「鐘が淵」という伝説がのこっています。この前法内の南はしは、田が一面めんにひろがり、広い水田となっています。ちょうど、この広い水田を見おろすように、こだかいおかの上に、慈眼寺じげんじという寺が、たっています。このおかのふもとを「鐘が淵」といい、この地名と寺の鐘にまつわる話です。

いまから、千年ほど前、平将門たいらのまさかどという武将ぶしやうが、たかいていたところ、広い水田は、広い沼ぬまであったそうです。(今の山川沼は、そのころの沼のこりです。)そのころの人々は、この沼を利用して、いねをそだて、秋にはおおくの米をとり、村人たちのたいせつな食りようとなっていたそうです。しかし、少しの雨でも、

鐘 が 淵

すぐに沼の水はあふれ、村人たちがくろうしてつくつたいねや田をあらしてしまい、秋のとり入れをまたずに、いねはかれ、田はあれてしまったそうです。そして、まいとし、雨がふると村人たちは心配しんぱいし、水害のために苦しい生活をいられていたそうです。

あるとき、村人たちは、水害から自分たちのくらしをまもろうとして、沼のまわりをつつみでかこみました。村人たちの力で、りっぱなつつみができあがり、ことしこそはと村人たちは田や畑ののらしごととにせいをだしました。しかし、この年も秋のながあめで、村人たちの苦勞くろうも水のあわとなり、つくりあげたつつみも、沼の大水のために、こわされてしまいました。たびかさなる水害によつて、村人たちは、はたらく気持さえうしないかけていました。そのすがたをみて、慈眼寺の住職じゆうしやくは村人たちをばげまし、前よりもりっぱなつつみを村人とつくりました。そのおかげで、村人たちはあんしんして、田や畑のしごととにせいをだすことができました。それから、二年の年月がたち、三年目の春をむかえました。ことしもゆたかな秋のみのりをねがって村人たちはいっしょうけんめいにはたらきました。

しかし、五月のなかばをすぎると、雨がふりつづきました。村人たちは、空をあおいでは心配し、また、このつつみが「こわされてはどうしよう。」と、よれば、みんな不安げに話しかけていました。村人の心配をよそに雨はふりやまず、もう十五日もふりつづいています。村人たちは、いつ沼の水があふれだすかと心配し、あつまっては相談をしました。しかし、いろいろな考えがでて、いっしょうに話しがまとまりません。村人たちは、こまつたすえに、慈眼寺のぼさつ様ぼさつにおいのりをして、つつみをまもつてもらうことになりました。村人たちは寺にあつまり、いっしょうけんめいにおいのりをしました。すると、村人たちの前に、ぼさつ様

あらわれ、  
 「寺の鐘を沼になげいければ、かならず、つつみはまもられる。」  
 といって、ぼさつ様はすがたをかくしてしまいました。村人たちは、さつそく住職とそうだん  
 をし、寺の鐘を沼になげいれ、ぼさつ様においのりをしました。すると、やむことのしらな  
 った雨もやみはじめ、村人たちが心配した水害もなく、もとの平和な村にもどりました。  
 それからというもの、どんなに雨がふろうとも、沼の水があふれたり、つつみがこわれたり  
 することがなくなつたそうです。

## 首切り地蔵

明治十四年七月二十四日。  
 首切りの刑が廃止になるまで、結城にも西の宮刑場けいじょうと呼ばれる首切り場がありました。  
 首切り場というのは、重い罪を犯した人の首を罰として切り落とした刑場のことです。  
 ある秋の日のことです。  
 秋といっても、まだ木々の緑が色濃く残っている秋のはじめのことです。  
 この日は、朝からどんよりと曇っていました。  
 刑場は、杉の古木やところどころに姿を見せるくぬぎやならの木々に囲まれ、シーンとしず  
 まりかえっていました。  
 その静けさを破るように、ときおり秋風がならやくぎの葉をワサワサワサワサとゆすりなが  
 ら、通りすぎていきました。  
 刑場を横切る秋風は、背すじを冷いものがスーと通り過ぎていったような感じで、さびしさ  
 とも恐しさともつかないものを感じさせます。  
 風は刑場の南のすみの水分をふくんで真黒な地面の上に、静かにすわっているこけむしたお  
 地蔵さんのほほをなでながら、木立の中に消え去りました。  
 年老いた、身なりの貧しい刑場の役人は、ごさをこわきにかかえ、刑場の中ほどにほられた  
 穴のところ近づきました。

年老いた役人は、こわきにかかえたごさを穴の近くにおろすと、穴のふちにていねいにひろげました。

ひとつひとつの動作に力がなく、生気に欠けていました。

それからしばらくたつてからのことです。

刑場の入口の方に人の気はいがしました。

「こら、しつかり歩け。」

「はやくせんか。」

と、しつたするよくな、励ますような荒あらしい声がひびき渡ってきました。

木立を通して、五、六人の人が刑場に近づいてくるのが見えました。

人々のなかほどに、二人の役人に両腕を支えられた年若い男の罪人の姿が見えました。

罪人は、放心し、全身の力が抜け、歩く力をなくしていました。

からだを二人の役人にあずけ、よろよろしながら刑場に入ってきました。

それは、歩いてきたというより、引きずられてきたという感じでした。

刑場の穴のところに、ごさをしていた年老いた役人は、

「かわいそうに。あんなに若い男が首を打たれるとは、いったい何をしたのだろうか。」

と、ひとりごとを言いながら、引かれてきた若い男から目をそむけました。

引かれてきた男は、穴の前にしかれたごさの上にもすわるように命じられました。

若い男は、両腕をおさえている役人から逃れようとして、全身の力をふりしぼって、はげし



くからだを左右にゆすりました。

しかし、長い間のろうの中の生活で、身も心

もつかはてている罪人は、

「こら、何をするか。」

「あばれてもためにならぬぞ。」

という、二人の役人の腕力とど声におさえつけ

られ、ごさの上にもすわらされてしまいました。

ごさの上にもすわらされた罪人は、かんねんし

たらしく目をとじ、全身をかすかにふるわせて

いました。

やせて、青白い顔をこわばらせながら、男はなにやら口ばしりはじめました。

かすかな声で、よく聞きとれませんでした。

しかし、年老いた役人には、死後の極楽往生を願つての念仏のように思いました。

首を切り落とす役人が、若い罪人の左うしろに立ちました。

たすきをかけてまくりあげた両そでからあらわれた二本の腕は、筋肉がもりあがって、ひきしまっていました。

首切り役人は、腰の大刀をサッと引き抜くと、ぞつとするようなするどい光りを発し抜身に

サーッと水をかけました。

刀身を流れる水を見つめる目はするどく、光っていました。

刀身についた水滴を軽く振ってはいらい落とすと、刑場のまわりをつつみこむように茂り立つ、木々の梢にどんよりとおおいかぶさるようにたれこめる灰色の空に目を移しました。

それは、ゆれ動く心をしずめていた感じでした。首切り役人は目を罪人にもどすと、両足のかんかくをきめ、腰を落とし、大刀を高くかまえました。

ひと呼吸とると、高くかまえた大刀をサッと振りおろしました。一瞬、地球上のすべての物の動きが止まったかと思われるほど、シーンと静まりかえりました。

その静けさを破るように、刑場のまわりをとりかこむ木々の木立の中から、秋のせみの声か、ジーン、ジーン、ジーン、ジーンとはげしく聞こえてきました。

秋のせみの鳴き声には、どこかさびしさが感じられました。

刑場のこけむしたお地蔵さんは、いつものように顔をうつむけて、悲しそうにすわっていました。

ここで、このようにしてたくさんの人々が処刑されました。

一日に何人も人が処刑されたこともありました。

このころの様子をしのぶものとして、結城小学校の講堂のところに、黒く苔むしたお地蔵さんがいまでも残っています。

ふつうお地蔵さんというと、頭が丸く、にこやかな顔をし、しゃくじょうを持つて立っている石仏を思い出すでしょう。

しかし、ここにあるお地蔵さんは、頭に先のとがったぼう子のようなものをかぶり、顔をうつむけ、深い思いに沈んだような姿で、はすの花の台の上ですわっています。

丸い頭に、にこやかな顔をしたお地蔵さんの姿がつけられる以前のお地蔵さんです。

このお地蔵さんをよく見ると、首から上の部分は、セメントで作られた新しいものがついています。

あるとき、このお地蔵さんの首は、一刀のもとにバッサリと切り落とされたように、落ちてしまいました。

その後、いくどもいくどもこの首を、体とつなぎあわせてみたのですが、どうしたわけか、何度つなぎあわせても、いつの間にかまた落ちてしまうのだそうです。

人々は大へんふしぎに思ったり、こわがったりしました。

このためか、人々はその青年のようにみじめな最期をとげた多くの罪人の恨みのせいだと、こわがったりしました。

また、首切り場で、首を切り落とされた多くの人々を供養するために建てられたお地蔵さんなので「首切り地蔵」と呼んで霊をなぐさめることとしたのだそうです。



## 七つ石

天正十八年の春、今からおよそ四百年前の春のことです。

結城城の殿様結城晴朝は大軍をひきいて小山の祇園城をせめ、せめほろぼしました。

このころ、世の中は大へんみだれていました。日本の国の中にたくさん殿様が住み、きょうはあちらで今日はこちらでというように、絶えず戦いをくり返していました。

戦いのたびに人々は家を焼かれたり、耕したばかりの田畑をあらされたりしてしまいます。ときには、命さえもうばわれてしまいます。このため人々の生活はますます、毎日が不安の連続でした。

晴朝が祇園城をせめほろぼしてからしばらくたったある日。

結城城の家臣の一団が、晴朝の命令でせめほ

ろぼした祇園城をとり上げるために、小山へ向って出発しました。

その日は、春の日が野山や田畑にさんさんとふりそそぐ、あたたかな日でした。

結城から小山へ通じる街道ぞいに、街道をおおいかぶせるように立ち並ぶ木々のこずえの芽が、ふつくらとふくらんで若葉に変わろうとしていました。

ぞう木林の中に、いちだんと高くそびえ立つ赤松の葉も、緑を増してあざやかに見えました。田畑や街道の土の色も、真黒に変わり、きびしい冬の寒さからときはなされた自然は、生き生きとしていました。

しかし、祇園城をとり上げに向う、結城城の家臣の人々の姿は、やりやかたなでぶそうし、いさましそうに見えましたが、心はけっして明るいものではありませんでした。

人々は、

「ワァー、ワァー、ワァー。」

と、泣きさけぶ子ども達の姿。

かみの毛や着物のすそを取りみだし、必死のぎょうそうで逃げまどう女の人達。

「ギャッ。」

「ウワーッ。」

「ウウッ。」

と、苦しみやむねんの声をはりあげながら、血に染まって死んでいった、たくさん敵や味方の武士の姿。

親や身内の人達を失なった人達の悲しみに満ちた、暗くしずんだ顔などをおもいだすと、戦

いに勝ち、敵のお城をとり上げに向うのだといつても、喜び勇んだ気持ちになることができませんでした。

人々は、手に持ったやりや腰にさげたかたなを、このときほど重く感じたことはありませんでした。

結城城の家臣の一団が小山領内に足をふみ入れると、領内のあちこちに、打ちこわされた家や焼けだされた家々が、むざんな姿で残っていました。

どこからともなく「トントン、トントン。」と打つ、つちの音が響きわたってきました。

祇園城下の人々は住むところをうばわれ、田畑をあらされた悲しみを胸にひめ、あしたからの生活を心配しながら、打ちこわされたり、焼かれたりした家や人馬にふみあらされた田畑をもとどおりになおしていました。

子ども達だけが着物のすそを春風になびかせ、どろで真黒によごれた顔をほころばせながら、元気よく走り回って遊んでいました。

子ども達は結城城の家臣の一団を見つけると、何かこわいものでも見たというように、「あつ、ゆうきのさむらいがきた。」

と、口々にさけびながら、くもの子を散らすように、いずこへともなく走り去ってしまいました。

家をたてなおしたり、田畑の仕事をしていた人々は、仕事の手を休め、結城城の家臣の一団が通りすぎるのを、やせたほほにギラギラと輝く目で、じつと見つめていました。

人々の顔は、怒りに燃えていました。

人々の怒りや悲しみを知らぬげに、道、道の両側に立ち並ぶ木々のこずえでは何匹かの小鳥がチチ、チチ、チチッ、チチィとさえざり合い、美しい声を響きわたらせていました。

小山の祇園城は、思川の東岸の小高い丘の上にあります。

思川の流れと深い川底が、西からせめてくる敵の守りになつてゐる名所です。

このお城は、今からおよそ八百何年前、小山政光という人が館をつくり、それ以後、小山一族が発展するための中心地となつたところでした。

祇園城に着いた結城城の家臣の一団が城内に入ると、つい先ごろまで小山六十六郷をおさめる中心地として、いくむねもの館がどうどうとたち並んでいたつばさはどこにもありません。

城内は焼かれ、打ちこわされた館のさんがいが、見るもむざんな姿で残つていただけでした。城内のあちこちには、さずつき死んでいった人々の流した血のあとすら残つていました。

一団の人々は城内の様子を調べ始めました。

杉の古木にとりかこまれた祇園城は、ひっそりとして静けさそのものでした。

杉の木々はまだ赤茶けた葉をつけ、祇園城のあれはてた姿をしようちようしているようでした。

しばらくしてから結城城の家臣の人々は、庭園に並べ置かれた七つの石を発見しました。

黒々とこけむした七つの石はたくみに組み合わされ、人々の心をひきつけました。

七つの石を発見した人々は、

「これはなんとすばらしい石組であろう。」

と、感たんの声を発しました。

七つの石によりそうように、梅の古木が黒々とした幹を横たえ、ところどころにひよろひよろとのばした枝に、白い花を咲かせていました。

「うーん、ほんとうにみごとだ。」

と、集まってきた他の人々も、その美しさに感心してしまいました。

「この七つの石をじつと見ていると、戦の恐しさや苦しさを忘れてしまおう。」  
と、いう人もありました。

七つの石のうしろの方に、大平山が春がすみにかすんで見えました。

「祇園城からは大平山、結城城からは筑波山、山の形はすこしちがいますが、眺めはとつてもよくていますね。」

つと、石を見ている一団の人達から少しはなれて立っていた若い武士が、大平山を眺めながらいきました。

「なるほど、広い平野の中にぼつんとそびえ立つ大平山の眺めは、結城から見た筑波山の眺めと実によく似ている。」

と、他の人々も感心したようにうなづきました。

そのうちに、

「この石を結城城に持っていき、筑波山を背景にして並べたらもつとみごとだろう。」  
と、いう人がありました。

他の人々もそういわれてみると、そうにちがいないと思いました。

結城城の家臣の人達は、七つの石を結城城に持ち運ぶことにしました。

結城城に運ばれた七つの石は、もとのようにたくみに組み合わされて結城城の庭園に置かれました。

人々が考えたとおり、結城城の庭園はさらに美しくなりました。

いく日かの夜がすぎました。

また夜になりました。

結城城の夜は、しんとしずまりかえって物音ひとつしませぬ。

しっとりとしめつた空気を通して夜空の星が、やわらかな光を地上に投げかけていました。

風ひとつありません。

ところが、城内見回りの人が、七つの石のところまでくると、どこからともなく、風の音のような、むせびなくような声が聞こえてきました。

見回りの人が、

「だれか。」

と、大声をだして問いかけましたが、返事はありません。

星明りを通して、あたりを見回しましたが人のけはいがありません。

見回りの人は、かたなに手をかけ身がまえながら、七つの石のところに近づいてみましたがやはり人のけはいはまったく感じられません。

あたりに注意をはらい、よく耳をすませて泣き声をたしかめてみると、泣き声は、七つの石から聞こえてくるのでした。

見回りの人は「ギクッ。」としました。

もういちどたしかめてみました。がむせび泣く声は、たしかに七つの石から聞こえてくるので

見回りの人は、急いで仲間の武士達に知らせにいきました。  
知らせを受けた武士達は、

「石が泣くなんて、そんなことがあるものか。」

「くせものがしのんでいるにちがいない。」

と、口々にいいながら七つの石のところにかけつけました。

しかし、七つの石のあたりには人のけはいはまったくなく、むせびなく声だけが聞こえてきました。

石 七 つ

かけつけた武士達がよくたしかめてみると、七つの石が、

「小山が恋しい。小山が恋しい。」

と、むせびないでいるのでした。

次の夜も、また次の夜も七つの石は、

「小山が恋しい。小山が恋しい。」

と、泣きつづけました。

そのことについて晴朝に報告があったのは、何日かたつてからのことでした。

そのとき、晴朝は年老いた家臣のひとりと、春のひをあびながらごをさしていました。

その話を晴朝と一緒に聞いていた年老いた家臣は、

「長い間つづいた祇園城も、このたびの戦でおとりつぶしになつてしまいました。小山領

住んでいる人々は、そのことを大へん悲しんでおられることでしょう。その悲しみの心が、何代もの城主とともにすごした七つの石に、しみこんでいるのでしょう。」

晴朝は大きな目玉とゆうそうな八の字形のひげをつけた顔をこわばらせながら、だまつて聞いていました。

晴朝は、白いご石を右手ににぎりしめたままじつと目をとじ静かに、何やら考えていました。  
しばらくして目を開くと、

「その石を小山の城に返してやろう。」

と、知らせにきた家臣にいい、右手に持った白い石をごばんの上に、パチリと力強く置きま

石 七 つ

た。  
年老いた家臣は、

「それはよろしゅうございます。結城と小山はこのたび戦こそいたしました。もともと藤原氏の出、同じ一族の間がらでございますから。」

といつて、ひとりりなづきました。

どこからかうぐいすの鳴く声が、

「ホケキョ、ケキョ、ケキョ、ケキョ、ケキョ。」

と、聞こえてきました。

晴朝と年老いた家臣は、またもとのようにパチリ、パチリと、ごをうちはじめました。  
その後、この七つの石は祇園城のもとのところに返されました。



もとのところに返された七つの石は、夜がきても、もう泣きませませんでした。  
杉の木立にのぼる、オレンジ色に輝くお月様のやわらかな光にてらされて、黒く光りながら  
静かにすわっていました。



### 袖 切 り 橋

今からおよそ七百五十年ほどむかしのことで  
す。世の中は、平氏を中心とした貴族的な政治  
から、源氏を中心とした武家政治へと、大きく  
移り変わろうとしていました。世の中の激動期  
でありました。そのため、日本のあちこちで、  
源氏と平氏の戦いがおこなわれていました。た  
くさんの戦いの後、源氏を中心となつた源頼朝  
が、新しく日本の国を治めるために鎌倉に幕府  
を開きました。

この頃、結城の北東の台地に古くから残る城  
跡に、結城七郎朝光がお城を築きました。朝光  
は源頼朝の厚い信任をえていましたので、この  
地方を強い力を持って治めていました。朝光は  
大へん勇敢な武将として知られていました。勇  
敢な武将として、合戦で数々の大手柄を立てる  
ということは、たくさんの人々を殺し、ほろぼ

すという事です。戦のない時、朝光はいく重にもはりめぐらされたお堀に囲まれた城内の館で、日夜じつと考えこむ日々が続きました。ときどきひとりごととも、自分の心に言い聞かせるようにともつかぬように、

「数々の合戦を通し、たくさんの人々を傷つけ、殺してしまつた。だが、戦だからやむをえな

### 袖切り橋

と、つぶやくことがありました。そんな時の朝光の顔には暗さが宿り、いつものひきしまつたたんせいさはどこにも見られませんでした。合戦とはいえ、罪もない人々をたくさん殺したりしたこと心の苛責は、打ち消すことができません。朝光は迷い続けました。百姓たちの苦しみも大へんなものでした。たび重なる戦いで親、兄弟や子どもを失い、家は焼かれ、打ちこわされて住む所をなくし、田畑は踏み荒らされて、食べ物にもことかくしまつてした。乱世では武士にも百姓にもそれぞれの苦しみがありました。人々はなんとかして、それらの苦しみから逃れようとしてました。けれども、どうしたらよいかわかりませんでした。

親鸞が妻の恵信尼と子どもと共に、坂東に住む人々のために専修念仏の教えをひろめようと決意し、越後の国府（現在の新潟県直江津市）を出発したのは、ちょうどそんな時でした。

一二〇七年、今まで行われていた仏教と親鸞達のとをえる新しい仏教の対立から親鸞は越後に、親鸞のお師匠さんの法然というお坊さんは土佐（現在の高知県）に流されてしまいました。この事件は承元の弾圧といわれています。

それから六年たちました。流罪をとかれた親鸞は越後の国を後にし、道みち専修念仏の教えをとこなながら常陸の国（現在の茨城県）に入り、笠間郡稲田郷にその住いを定めると、そこを

根拠地にして、毎日、毎日念仏の教えをひろめて歩きました。て歩きました。親鸞の布教活動は日夜を徹して行われました。

親鸞の教えは、

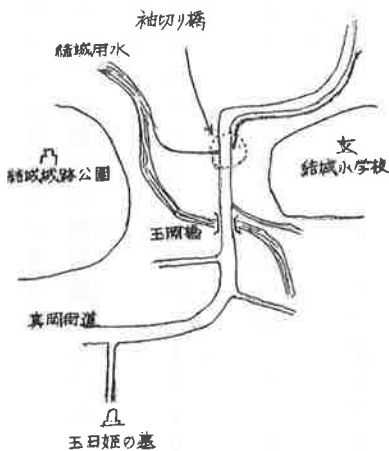
「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……と、いつもとなえていれば、どんな人でも阿弥陀仏が悩みや苦しみから救つてくれる。」

というわかりやすいものでしたので、たくさんの武士や百姓に理解され、乱れた世の中の苦しみから救われようとしていた多くの人々の信仰を集めました。親鸞の教えは浄土真宗とか一向宗とか言われています。

朝光も親鸞の噂を聞きました。朝光はさつそく親鸞の教えをこいました。親鸞の教えの深さに心を打たれた朝光は、浄土真宗を信仰するようになりまし。朝光の浄土真宗に対する信仰の強さは、大へんなものでした。朝光は下野の国薬師寺新居郷（現在の栃木県下都賀郡南河内町）に念仏を修行するための道場を建て、親鸞の弟子である真仏房をそこに招きました。また朝光の娘を真仏房の長男の信証房に嫁がせもしました。

ある日、朝光は、

「恵信尼さんを結城に住まわしてくださるわけにはいかないでしょうか。結城に住んでいただ



き、近在に住む女の人々にも浄土真宗を教えていただけたらと思つています。」  
 と、親鸞にたのみました。恵信尼は大へん信心の深い人で、親鸞の布教活動をかげながら助け  
 てきましたが親鸞はしばらくの間、じつと考えていました。  
 「妻が結城に住むことによつて、結城の人々のお役にたてるのなら、結城に住まわせましょう。  
 妻もきつと喜んで承知してくれることと思ひます。」  
 と、快く承知してくださいました。朝光は緊張した面もちで、親鸞の返事を待つていましたが、  
 親鸞が承知してくれると満足そうにっこりと笑いました。  
 朝光はさつそく、お城の近くに恵信尼たちが住むための館をつくりました。館ができあがる  
 と、恵信尼と子どもたちは、稲田から移り住みました。恵信尼は近在の女の人たちに、おりを  
 みては浄土真宗の教えを広めました。親鸞も夜に昼を徹して、浄土真宗の教えを説いて歩きま  
 した。このようにして親鸞は常陸の国や下野の国などで、およそ二十年の間、その教えをひろ  
 めつづけました。

そのころ日本の国を治めていた鎌倉幕府の人々も、親鸞の教えを受けたこともありま  
 した。ところが、長い年月の間に鎌倉幕府の人々の考えが変わつてしまひました。基礎が固まりはじ  
 めたばかりの鎌倉幕府は、たくさんの人々が一か所に集まつて、教えを受けたり、お話し合ひをし  
 たりすることに不安を感じました。そのため、鎌倉幕府は親鸞たちに教えをひろめることを禁  
 止してしまつたのです。親鸞は大へん困り、悩みました。なんとかして、もう一度阿弥陀仏の  
 教えを人々に説きひろめることができるようにしなければならぬと思ひました。親鸞は草庵  
 にこもつて日夜考え続けました。親鸞は天皇の住んでいる京の都に行つてみよう、何か道が開

けるかもしれないと思ひました。

生まれ故郷の京都に帰つてみることにした親鸞は、身の回りの始末をすると、稲田の草庵を  
 発ちました。草庵の回りを取り囲むように生い茂つてゐる木々の木立が、うつすらと緑に染ま  
 つて輝く、暖かな日でした。途中、下野の国の高田に立ち寄りましました。ここは、親鸞が下野の  
 国に教えをひろめるための中心地としたところだったので、親鸞の教えを受けた人々がたくさ  
 んいました。親鸞が教えをひろめるために使用した阿弥陀堂は、芽ぶいたばかりの緑の木々に  
 包まれ、春のにおいに満ちあふれていました。高田の近在の人々は親鸞が京都に帰るといふこ  
 とを聞き、大へん悲しみましました。

親鸞はここに何日か滞在して、高田の近在の人々と別れの挨拶をすませると、木立の中の道  
 を結城に向つて旅立ちました。木立の中の道を通り抜け、田畑の中をくねくねと曲つて続く小  
 道にでると、春の陽がポカポカと親鸞に当たつてはねかえりました。親鸞は曲がりくねつた田  
 畑の中の道を抜け、鬼怒川のほとりにでました。鬼怒川の清流を右手に見ながら、親鸞は歩き  
 続けました。足を止め、今きた道をふり返ると、筑波山と加波山が田畑のむこうに続く木立の  
 上にそびえ立つていました。親鸞は教えをひろめる道すがら、毎日のように仰ぎ続けた山なの  
 で、別れるのがさみしいような気持ちになり、じつと見つめていました。

しばらくして中島の渡しにでました。村人が二、三人、舟が出るのを待つていました。筑波  
 の山が紫色に変わりはじめていました。

親鸞が恵信尼の住む館に着いたときには、陽が今にも沈もうとしているところでした。結城  
 城をとり囲むように生い茂つてゐる杉の木々が、黒々としていました。恵信尼の館は、親鸞の

訪れによつて、急に明るくなりました。久しぶりの家族そろつての夕食は、楽しさに満ちあふれていました。

いつのまにか夜がふけ、家族や召使が寝静まつた惠信尼の館は、物音ひとつしませんでした。親鸞は、惠信尼の顔をしみじみと見つめながら、

「ごぞんじのように、専修念仏が幕府の命令により禁止されてしまいました。」  
と、ぼつりと言いました。惠信尼はだまつて、親鸞の次の言葉を待ちました。松の木をけずつてつくつたろうそくがゆらゆらとゆれていました。

「この危機をなんとかしなければならぬと思つてはいるのですが、よい考えが浮かびません。わたしが坂東からはなれると、とりしまりの目もいくらかやわらぐかもしれません。そのため京都に行つてみようと思つています。」

と、言葉を続けました。親鸞の顔は、苦しみに満ちていました。親鸞は布教を禁止された怒りと、これからむかえなければならぬ別れの悲しみに、黙念として、耐えていました。親鸞はこの時、六十三才になっていました。親鸞の顔には、いく本ものしわが深くきざまれていました。

この当時、常陸の国から京都までの道中には、多くの日数と数多くの危険がまちうけていました。途中には宿もあるとは限りませんので野宿をしなければならぬこともあります。また、野盗が出現することもしばしばありました。もう二度と生きて逢うことができないかもしれせん。二人は、いつまでもいつまでも話し合つていました。紙燭がすき間風にゆらゆらとゆれて消えかかり、しばらく沈黙が続きました。惠信尼は数々の迫害にあいながら、親鸞とともに

専修念仏の教えをひろめ続けた日々のことを想ひだしてました。

それから何日かが過ぎました。とうとう出発の日がきてしまいました。親鸞が京都にもどることを聞いた弟子や近在の人々が、早朝から、別れを惜しみ、集まつてきました。親鸞はこれらの人々と別れの挨拶を交しましたが、いつになつても名残りはつきません。親鸞はつきぬ名残りをふりはらつて、館を後にしました。人々は親鸞の後に続きました。杉の古木に包まれた結城城と南西にゆるやかな勾配を持つて広がる雑木や杉の木に包まれた台地にはさまれた低湿地の中を南北に走る街道を親鸞は京都に向つてゆつくりと歩いていきました。

しばらくいくと、街道を横切つて流れる小川に小さな木の橋がかかつていました。親鸞はすきとおるように澄んだ水面にさざなみをたてて流れる小川にかかる木橋の上に立ち止まると、後を振り向き、

「みなさん、ありがとうございます。ここでお別れしたいと思ひます。」  
と、見送りの人々に言いました。人々はうちしおれて、無言のままじつと親鸞の顔を見つめていました。気を取りなおした何人かの人々が、

「おからだに、じゅうぶん気をつけてください。」  
「お元気で。」

と、思い思いの別れの挨拶を交しました。親鸞によりそうように歩いてきた親鸞の娘は、そばに立ちすくみ、目にいつばいの涙をうるませながら、親鸞の墨染の衣の袖をぎゅつとにぎりしめていました。

親鸞は、

「大へん長い間、お世話様になりました。みなさんもくれぐれもおからだに気をつけてください。妻や子どものごこと、よろしくお願いいたします。」

と、別れの挨拶をして、右手に持った杉の木で作ったつえを固く握り、最後に、妻や子どもたちを向けながら足をふみだしました。そのとたん、親鸞の衣の袖がピリ、ピリピリピリと小さな音をたてて切れてしまいました。衣の袖の切れる音とともに、衣の袖を握った親鸞の娘の泣き声が聞こえました。見送りの人々の列の中からも、しのび泣く声もれてきました。人々の悲しみを知らぬかのように、小川の水は水際の若草をおしわけながら、さらさらと流れていました。



### 将門とその妻

鬼怒川の近くに豊田の里というところがありました。そこに家を持っていた平将門は、おくさんの「桔梗の前」と一緒にくらしていました。二人はいつも一緒に、豊田や岩井、守谷のあたりを歩きまわっていたので、里人たちは、その仲のよいことをうらやましく思うほどでした。

ところが、将門は不幸なことに、家の財産のことでおじたちとあらそいをおこし、ついに、おじの平国香を殺してしまつたのです。おじの親せきの源護という人とも争いました。それは土地のことが原因でしたが、やがてそれは大きな戦いへと広がっていきました。将門は、日に日に勢いをもりあげ、戦いは将門の軍が一方的に勝ちました。

護は、将門のおじ平良兼に応援を頼んで、四千人もの兵を集めて、京都から帰ってくる将門

を不意討ちしよりとまちぶせました。何も知らないで、少しの家来をつれて将門は帰ってきたのです。そこを護はおそつたのです。これではさすがの将門もかなりはずがありません。それでも、どうやら命だけは助かりました。

将門は、さつそく兵を集めて護の陣地にせめ入りしました。将門のたたかいかたはふしぎな力をもつていました。朝に上総国かすみのくに（現在の千葉県）を不意討ちしたかと思いと、夕方には数百キロもはなれた相模国さがみのくに（現在の神奈川県）に突然現われるといった調子です。

そして将門は、またたく間に関八州せんぱしゅう（現在の関東地方）をせいふくしてしまつたのです。さらに天慶二年（九三九年）十二月十五日相馬の土地に、京都を形取つた大内裏をきずき、自分から親皇しんのう（新しい天皇）と名のりしました。

その頃、京都にいた国香の長男の貞盛さだもりは、将門をたおす計画を立て、朝廷に許しを願ひ出ました。こうして、朝廷から将門をたおせとの命令を受けた貞盛は、下野しもつけ（現在の栃木県）にたつてもつていた弓の名人、依藤太藤原秀郷におうえんを頼んだのです。

将門の妻の「桔梗の前」のふつくらとした横顔にさびしげなようすが見えはじめたのは、ちょうどその頃のことでした。それというのも「桔梗の前」が秀郷の娘だつたからです。戦いの前の夜、「桔梗の前」は自分から命をたちました。秀郷、貞盛の軍と将門が戦うさまを見るこゝろがでなかつたのでしよう。

ついに将門と秀郷・貞盛の軍と戦う日がきました。天慶三年二月十四日、関八州には春の風が、右に左にかけめぐり、黄色い砂煙りがまいあがる中を、衣冠姿いかんかまえの大將、将門が一人前面に現われました。ドツと軍勢が将門めがけて押しよせてきました。するとどうでしょう。将門の

姿は、ここまで来てみる、というように砂煙りの中に消えていきました。するとこんどは正反対の南の方に現われました。しかし、大將の秀郷はこのようすをじつと見ていました。そして、口の中で、「こめかみの動く将門」とわけのわからぬことばをつぶやいていました。

秀郷の軍もつかれて、たたかいかも負けそうになつてきました。その時です。将門がふたたび前の方に現われました。きんちようをしているのかこめかみが激しく動くのが手にとるようになり、みえました。にっこりほほえんだ秀郷は、なかでも長いかぶら矢をぬきとると、きりきりと弓を引きしほりました。

「南無三……」

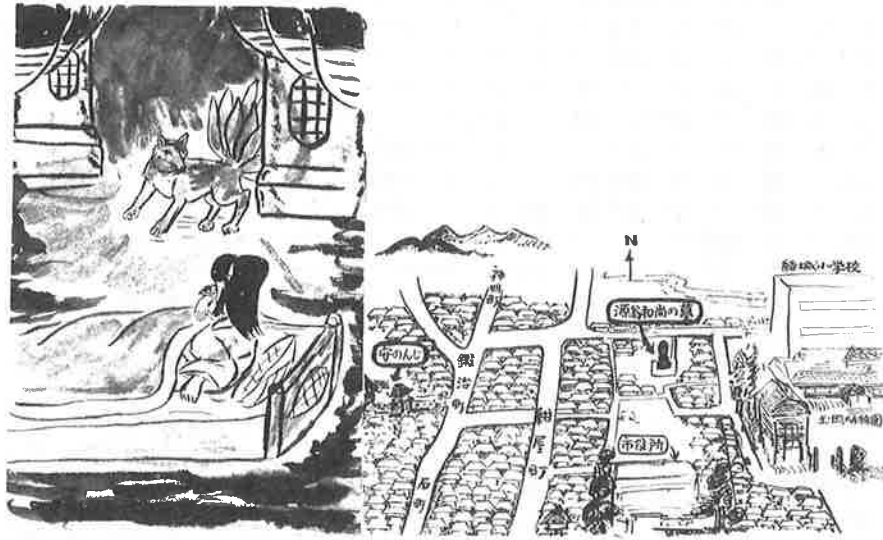
ビビッと音をたてて、矢は、ねらいをはずすことなく将門のこめかみにつき通つたのです。将門はついにやぶれました。

将門の早わざ、戦法のトリックはほかでもない、七人の影武者だつたのです。秀郷はどれが本物の将門か、その秘密ひみつをしらべることが、そつと「桔梗の前」に命令していたので。桔梗のかなしみは大変なものでした。それでも親皇と自分を呼び、朝廷にてむかひをする将門は悪い人とされていたのです。桔梗はついに「ほんとうの将門はこめかみが動く」と秀郷に教え、自分から命をおとしたのです。

「桔梗の前」の墓のあたりには、それ以後、キキョウの花はいつさい育たないといわれています。また花の色と同じ紫の衣ころもをつけて墓の前を通つただけでも病気になるといわれています。また将門にかんけいのある神社の前もキキョウの紋もんをつけて通ると病気になるともいわれています。たぶん、将門をうらぎつた桔梗に対する人々のいかりがそんなうわさとなつたのでしよ

将門とかんけいあるものは、結城地方にもたくさんあります。もと上山川中学校があったところ、旧結城寺という寺がありました。将門がこの寺にお参りしたり、寺の近くを通ったところが古い本にかかれています。山川新宿にあった綾戸城（山川城ともいう現在の結城寺南方）も将門の館やかたがあったところといわれています。また、上山川の原や南茂呂にある諏訪神社は、将門と戦った秀郷がいくさに勝てるようにと長野県の諏訪神社の神様をまつたものといわれています。

う。



源翁和尚と九尾の狐

一 安穩寺に伝わる伝説一

昔、昔、ずっと大昔の中国に殷という国がありました。殷の領土、冀州に住んでいる蘇護という人の娘に寿羊という十六さいになる少女がいました。顔立ちも姿も大変美しく、評判になり、その噂を聞いた王様の紂王はたびたび使いを遣わして遂に蘇護を説きふせ、娘を官中に仕えさせることになりました。

寿羊の行列が都に向かつて旅をしている途中、恩州という所で宿をとりました。入浴し夕食も終わり、夜に入って、一同昼の疲れでぐっすり寝こんでいるときに、寿羊の休んでいる部屋に、さつと、生臭い風が戸のすき間から吹き込んだとみる間に、ふしぎなことに部屋のともしびというともしびがふつと消えて、まっ暗闇となつ

てしまいました。そしてその闇の中に、全身が金色の毛におゝわれ、顔が白く、尾が九本もある古狐。後に九尾の狐として恐れられた神通力を備えた狐が見えるではありませんか。狐は寿羊をかみころし、寿羊に化けて王城に入つていきました。

王様が宮中に到着した寿羊をご覧になると聞きしにまさる絶世の美人、紂王はすっかりお喜びなされ、名を姐己と改めさせ、側近く仕えさせることにしました。

それからの紂王はまったく政治をかえりみず、毎日毎夜酒盛りをするやら、国のお金をふんだんに使つて、まばゆいばかりのご殿をいくつも建てて、思ひのままのぜいたくをし始めました。人々は苦しみ、悲しみ、だんだんと紂王から国民の心は離れていってしまいました。

そのころ、西伯侯という聖人がいました。この人は後に周の文王になられた方で、自分の治めている地方でよい政治をしたから人々にたいそう慕われておりました。また、渭水という川のほとりで釣をしている人が、たいそう智謀にすぐれていることを聞くと、何回もその庵を訪れ、礼を尽くして軍師として迎え国の守りに役立てようともしました。この人が太公望という人です。西伯の死後、子の姫発（後、周の武王）は、太公望と共に殷の都、洛陽を攻め、敗れた紂王はついに鹿台というご殿に火を放つて自刃してしまいました。殷の湯王が天下を統一してから六百四十余年、二十八代にしてここに殷の国は亡んでしまったのです。

九尾の狐の化身、姐己も太公望にとらえられ、処刑されて数十尺も深い地中に埋められました。だが、あの妖術魔術にたけた老狐が、そのまま土中に埋ざもれてしまったのでしようか。

さて、話かわつて、南天竺（今の印度）の耶羯国に斑足太子という方がいました。音楽を愛し、中でも「ひちりき」の名手でした。ある秋の暮れ、高台に上つて「ひちりき」の一曲を吹

奏していると、森の彼方に曲に和して美声をもつて歌う声が聞こえてきました。太子が臣下に命じて探させましたところ、ひとりの美しい女がいました。それはそれは美しい限りで、どこかの国の者か、まるで天女が舞い降りたかと疑うばかり。なぜこんな所へ来たのかと、たずねますと、「私は中国、殷の紂王に仕えていたのですが、武王に亡ぼされ、王がなくなると武王が私を捕えようとしたので、忍び忍んで逃げ隠れているうち、このような名も知れぬ土地へ来てしまいました。昨夜着いたばかりでございます。」と泣く泣く申しますので、太子もかわいそうに思ひ召され、すぐお側に仕えさせることにしました。さらに酒宴を開き、太子みずから一曲を歌い舞いますと、その女の人もこれに和して一曲歌いました。太子はたいへん喜ばれ、翌日皇后として迎え、華陽夫人という名を下されました。この華陽夫人こそ滅亡した殷の国から逃れて来たかの九尾の狐の化身に他ならなかつたのです。

華陽夫人は、何とかして斑足太子の心を乱し、ふだんの情深い心を、すさんだ心にさせてしまおうと企んでおりました。日がたつうちにだんだんと華陽夫人の思い通りに運ばれてきたある日、夫人はふとしたことから病気になるてしまいました。太子はたいそう心配されて、諸国の医師にみてもらったのでした。がききめがありません。

その時耆婆という名医がおりました。招かれて夫人の脈をみたところ、何と人間の脈とは思えない、まったく妖怪変化の脈であると診断されました。耆婆は大いに驚き、そのことを太子に申し上げましたところ、かえつて群臣列座の中で恥ずかしめを受け、命だけ許されて家に帰ることができました。

耆婆は部屋に閉じこもり、一心に占いをたてますと、夢の中に神様が現われ、「お前が国を



思い、妖怪変化を退治したいと願うなら、これより一千里北西に金鳳山という山があり、その山に薬王樹という木がある。この木の枝を持つてきて変化に見せれば、たちどころに正体を現わすであろう。」というお告げがありました。

耆婆は喜び、勇んで金鳳山めざして出発しました。どんどん進んでいくと、途中、ひとりのきこりに出会いました。そこで「金鳳山とはどこか。」と尋ねますと、「この山こそ金鳳山。」という返事。耆婆はあちらこちら薬王樹を探していますとある老人がやつてきました。そしてその老人は、「薬王樹とはこの木ですよ。」と教えてくれました。彼は天にもほれる心地でその枝を切り折り、往復九日もかかってやっと家にたどりつきました。

何回も何回もお願いしたり、国を思う忠臣たちの尽力で、耆婆は斑足太子と華陽夫人にやつとのこととお目通りすることができました。護衛の者が左右を取り囲む中で、耆婆は神木のはいった箱のふたを開きますと、居合わせた華陽夫人の総身がぐらりと揺らいたとみる間にぶるぶるとふるえ出し、その顔色は土色に変わり、殿中にひびきわたる叫び声を発して、例の九尾の狐となつて現われ、風を呼び、雲を起し、ひらめく稲妻にうち乗り、大空はるかにどこもなく飛び去つていつてしまいました。耆婆やその他の人たちの働きで、狐の野望は打ち砕かれ、耶羯国はますます栄えたということです。九尾の狐はその後どうなつたでしょうか。

さて、中国では周の武王が天下を統一してから約三百年ばかり後、十三世幽王という王様がありました。幽王は性格が乱暴で悪い家来ばかりを近づけましたので政治がうまく行われず、国民の心はだんだんと離れていきました。幽王の皇后を褒姒といひ、たいへん美しい人で、幽王は深く愛しておりましたが、褒姒は笑つたことがありません。王様は何とか笑わせたいもの

と家来たちに相談したところ、「一朝事ある時に諸国の兵を集める時に使ひ城のまわりの五つの烽火台は、今は平和のため使つたことがありません。これをいたづらして打ち上げたら、皇様を喜ばすことができましょう。」とのことになり、早速烽火を打ちあげさせました。諸国の諸侯は、「すは一大事、何ごとだろう。」と兵を集め、都に集まつて来ました。その数、十萬。楼台にのぼり酒宴を開きながら幽王とともにこのありさまを見ていた褒姒は、手を打つて大いに笑いました。諸侯は腹を立て、のしりながら帰つていきました。ところがその後、犬戎王が数万の兵をひきいて攻め寄せてきました。王は驚いて烽火を上げましたが、諸侯は前のことにこりて、ひとりとして馳せ参じる者はありませんでした。犬戎王はたちまちに攻めほろぼし、幽王と褒姒を斬り、位について平王となりましたが、この褒姒はあの九尾の狐の化身だつたのです。

それから時代は下つて中国は唐の時代、日本では当時盛んに遣唐使を中国に送りこんでいました。その中のひとり、吉備公も数年間唐土に滞在し、学問を修めていよいよ帰国することにになりました。中国の港を出て三日目、突然船中より十六、七才ばかりの美女が現われました。一同が驚いて尋ねますと「わたしは玄宗皇帝の家来、司馬元脩の娘で若姦と申す者です。日本の国にあこがれ、父母の許しも得ず、ひそかに船底に隠れておりました。どうか日本へ連れて行つてください。もし許されなければ海に身を投げ、ふかの餌食になるばかりでございます。」とまことしやかに頼みますので、一同は「しかたがあるまい。」とこれを許すことにしました。博多に着いた一同は久方振りの帰国さわぎでごつた返している間に、あの少女は姿を消し見失つてしまいました。この少女こそ例の九尾の狐だつたことは後になつてわかつたことでした。

堀川天皇の御代、先帝（白河上皇）の北面の武士であった坂部庄司蔵人行綱という者がある。過失のため山城国山科のほとりにわび住まいをしながらお許しの勅があるのを待ちつつ、お寺詣り、お宮詣りの毎を送っていました。

承徳二年弥生の半ば、行綱がいつものようにお寺詣りで帰り道、観世音、普門品を唱えつつ家路を急ぐその時に、どこからか聞こえる赤子の泣き声、行綱は足を止め、声のする方へ行つてみると、まだ七夜もたぬみどり子が綾羅の衣に包まれて捨てたのでした。行綱には子どもがなかつたので、「これはてつきり神仏がわたしに授けてくださったにちがいない。」と

うなづき、ふところに入れ、妻にも話をすれば大喜び、薬と名をつけて育てました。薬も七歳になり、まことに可愛く、その上、一を聞いて十を悟る程の利発者、手習い、ものよみはいりまでもなく、諸芸に秀で、特に和歌の道にも通じておりました。

長治元年春の半ばのこと、天皇は天下に御歌の題を賜わり、「ひとり寝の別れ」ということを詠んで奉るようにとのことでした。これはまつたくの難題で誰も奉る者がいないということでした。薬は誰から聞いたのか父、行綱に「私ひそかに一首の和歌を案じました。これを奉り、幸い天皇の御心にかないましたら、父のお怒りも許されるかもしれませぬ。どうぞ私をつれていつて戴きとうございます。」と申しますので、御歌奉行烏丸大納言光兼卿のやかたに行き、わけを話しましたところ、日ならずして参内のご沙汰がありました。

薬は衣服を整え、御殿にのぼり、天皇の御前で短冊にさらさらと書き下した歌を、御歌所内大臣雅実公が取られ高らかに詠まれたのは、  
夜や更けぬ 寝屋の灯火いつか消えて

わが影にさへ 別れてしかも

歌がすぐれているばかりでなく、手跡まで麗しいので、天皇もおほめになり、薬に対してはそのまゝ宮中に仕えるよう、父のあやまちは許し本官に復し、従五位下左衛門尉に任ぜられました。天皇は嘉承二年に亡くなられ皇太子が皇位につかせられました。鳥羽天皇とおつしやいます。当時薬女は十七歳、容姿すぐれ、博学秀才、歌道その他諸々のわざに至らざるなく心だても優しかつたので、天皇はこのほか薬女を愛しておられました。

元永三年秋の末、詩歌管絃にすぐれた者が集まり催しがあり、詩を賦し、和歌を詠じ、終日の盛宴は夜にはいつてもはてる気配もありませぬ。その時にわかに雲起こり、さつと吹き出した強い風に殿中の燈火ことごとく吹き消され、一寸も見えない真の闇、一同の者が驚き騒いでいる時に御殿の中にあやしい光、たちまち昼のように照り輝いたので、人々はあやしみ、いぶかしがった。これは薬女の身辺から出た光であった。多くの者が心配する中で天皇だけは少しも不思議なことに感じず、これは彼女が生まれながらの秀才で、聖教の道も悟り、心も曇りなため、あたりまえのことであるとし、即座に玉の一字を賜わり、玉薬前と呼ぶことになりました。

そのうち天皇はご病気になられてしまいました。そして医者が診察しても種々の靈薬を献じてても一向に快復なさりませぬでした。この時陰陽博士の阿部泰親が伝え聞き一心に占いをたてたところ「人間でないものが君側にあつて君を悩まし国を乱そうとしている。」という卦が出ました。そこで天皇に申し上げましたところ何度申し上げてもお聞き入れにならず、かえつて玉薬前のために閉門されてしまいました。泰親はこの上は神仏の加護を蒙らんと一心に祈願す

ると、夢に神様が現われ、「暮目鳴弦の法を修せばたちまち正体を現わさん。」とのお告げがありました。そこで清源殿の一角に祈壇を設け、十七日の満願の日に玉藻前のお出でを願います。かさず暮目の弓の弦を三度うち鳴らすと、みる間に玉藻前の顔色は土のようになり、目は血走り、すくつと立つと風を呼び、雲を招き、体は金毛白面九尾の狐となつて南東の方角に飛び去ろうとするではありませんか。泰親はかさず壇上にあつた四色の御弊を握つて投げつけますと、三色の御弊は地面に落ちてしまいました。青色の御弊一つだけは雲を追つて見えなくなりました。このよりすを見ていた殿中の人々は驚き、この旨を天皇に申しますと、不思議と天皇のご病気はすつかり快復されました。

さて、壇上の青い御弊が落ちているところには必ず九尾の狐がひそんでいるにちがいないと、全国にその旨を命令して探させましたところ、関東は下野国那須郡の領主に那須八郎宗重という領主が領内を見まわらせたところ、那須野の原に青色の御弊が一本落ちていたのを見つけた。そればかりでなく領内の百姓たちが一人、二人と行方不明になつたとの訴えもありました。そして日がたつにつれ、日に二十人、三十人と届けがづぎにされるようになりました。往来の人も絶え、農地も荒れて飢餓に苦しみ、そのまゝに捨てておくことができないう状態となりました。これこそ九尾の狐のしわざにちがいないと、朝廷では安房国の三浦介義純と上総国の上総介広常の二人にその退治を命じました。二人は一万五千余の兵をひきい、那須野をさして出発しましたが、丹誠をこらして神仏に祈願し、三浦介は霊夢に弓矢を、上総介は同じく神槍を与えられましたので、勇氣百倍、那須野ヶ原の野狐退治が始まりました。

九尾の狐は、泰親の祈とうによつて空の飛行を封じられており、一万五千の人数で追い立て

られましたがなかなか姿を現わしません。そして三日目、ものすごい異臭鼻をつくと感じるまもなく、小牛ほどもあり、全身金色の毛でおゝわれ、身のたけ七尺余、一丈五尺もある九本の尾を振りたて眼光らんと輝く怪物が毒焰を吐きつつおどり出て、人といわず、馬といわず、かみ殺し、蹴散らし、その様はこの世のものとは思われぬすごさでした。三浦介は、この時とばかり深く心を神仏に念じ、神授の弓に矢をつがえて射れば、矢はあやまたず狐の脇腹を深く射透しました。上総介がさかさ馬からとびおり、神力のこもつた霊槍をもつて狐をしとめたところ、野狐の屍は大きな石に変じてしまいました。

それにしても、かの九尾の狐は一たび化しては殷の天下をほろぼし、二たび化しては斑足太子の聡明をおおい、三たび化して西周をほろぼし、さらに日本に渡り、四たび玉藻前と変じて君側をけがし、今また五たび変じて石塊となつたのです。

そして九尾の狐が殺生石と化してから二百三十余年の後も殺生石に触れるもの、人も獣も鳥も、すべて毒気のために死んでしまします。朝廷ではたいそう憂い、全国の高僧に調伏の命を出しましたが、いずれも途中毒気に倒れて目的を果たすことができませんでした。

この頃、源翁和尚、下総、下野を行脚せられていました。この事を聞き、多くの人々の悲しみ、嘆きをみるに忍びず、ある日那須野に向向いて行きました。源翁和尚は九尾の狐のさまたげも乗りこえて難なく殺生石の前に至り、法力をもつて三たび石を打ち、一喝して引導を渡しました。すると空中より「われは執念、迷いの雲にのり、三千世界を魔界にしようとしたが、今は和尚の教化を蒙り、霧が晴れて悟りを得ることができた。」と声がし、あたりは静かなようすとなつたという。

そしてそれ以後、人畜が殺生石の災いから救われたということですが、そのことが天皇のお耳に達し、源翁和尚に対し、大寂院法王能照禪師の勅号を、そして、安穩寺には「結城山」の勅額を賜りました。当時結城家十六代の城主直光公が源翁禪師の徳を慕い、招いて安穩寺の開山としました。

現在、安穩寺には、後小松天皇下賜の「結城山」の勅額、源翁禪師着用のおけさ、殺生石を濟度した折の払子と数珠（県有形文化財に指定）、玉藻前が使用したといわれる鏡等が寺宝として残されています。

なお、昔は狐にとりつかれて気がおかしくなったのだとされていた狐つきの人は、安穩寺へ行つて祈禱してもらおうと狐が離れるといわれ、栃木県の方からも祈禱に来たそうです。また、今は門外不出の、源翁和尚の数珠を狐つきに触れさせると直るといので、数珠を借りに来たこともあつたようです。また、狐つきかどうかを調べるには安穩寺の山門をくぐらせてみればわかるとかで、狐つきは怖がつて山門をくぐろうとしないということです。

また、源翁和尚が那須野におもむき、殺生石の前に立ち、三たび錫杖で石を打つたところ、石が砕けたというところから、金槌のことを玄能というようになったのだそうです。

## 不動明王

将門が弘法大師の作つた不動明王を従者に背  
おわせ、都から本郷豊田の館に帰ってきたのは、  
延長八年（九三〇）のことでした。

これより十数年前、坂東の平野でのびのびと  
育つた将門は、多くの夢と希望を心に抱いて都  
に上り、右大臣藤原忠平につかえました。

このころ、都では、藤原一族が高位高官を  
しめ、はなやかな生活をしていました。

高位高官についた人々の多くは、自分だけの  
利益のことばかり考え、国を治めることに熱心  
ではありませんでした。

このため、人々は貧しい生活を送ってしま  
した。

将門は、都にきてからの十数年、衛士として、  
御所の警護にあたっていました。



この間に、このような貴族政治への失意と不満をつのらせていききました。また、将門は檢非違使という役につきたいと願っていましたが、つくことができませんでした。こんなことが重なって、都での将門の生活は失意に満ちた苦しいものでした。こんなことから、将門は都での生活の心のよりどころとして、将門の住んでいる家の近くに建つ東寺にお参りをするのを常としていました。

ある日のことです。

東寺からの帰りの道すがら、将門はじつと何やら考え続けていました。

くずれかけた土塀に囲まれた道は静かでひとつ子ひとり通りません。

従者は将門の思案を妨げまいと気づかっただけか、将門の後にすこし離れてだまって歩きつづけていました。

将門はとつぜん、

「豊田に帰ろう。」

と、従者に語りかけるようにとも、ひとりごとのようにともつかぬようにつぶやきました。

従者は将門の方に目を向けましたが、黙っていました。

将門は、しばらく歩いてから後をふり返り、従者に、

「わたしには、阪東での生活が性にあっていいる。阪東に帰って阪東の自然と共に生きよう。」と、よわよわしい口調でいいました。

従者は、

「は。い。」

と、うれしそうな顔をして合いづちを打ちました。ふるさとの山河や人々にあいたいという気持ちには将門と同じであつたにちがいません。

それからいく日か過ぎました。

都での生活の不安を東寺の仏にお祈りするこゝとで心の救を求めてきた将門、阪東に帰るに先だち、東寺のお坊さんに、

「わたしは、東寺のみ仏に常に救いを求め続けてきました。けれども、この度都での仕事も終わったので、生国の阪東に帰ることになりました。阪東に帰ってしまうと、東寺にお参りにくることができなくなってしまうます。つきましては、東寺のみ仏をひとつ阪東におまつりさせてください。」

と、熱心にお願ひしました。

東寺のお坊さんは、はじめは強くことわり続けましたが、将門の熱心なたのみに、ついに、承知してくれました。

それから約一月後、将門は東寺でいただいた



不動明王像と共に、生まれ故郷の下総の国豊田に帰りました。

将門が帰ると、家族はもちろん、将門の家で働いている人達も涙を流して喜びました。

人々の喜ぶ姿や阪東の広々とした平野に接した将門の失意に曇った心は、いつのまにか晴ればれとしてくるのをおぼえました。四方を山にかこまれて、おしつぶされそうに狭い都にくらべると、阪東はいい、自分がこれから生きていくところは、阪東以外にないと思われました。翌日、将門は一人の従者をつれて、留守中お世話になった人々の家に挨拶に出かけました。将門は馬の背にゆられながら大きく深呼吸をしました。青空のもとにくっきりとそびえたつ筑波嶺を前方に眺めながら、「阪東は昔とすこしも変わっていないなあ。」と、はればれした表情で従者に語りかけました。

王 明 動 不

留守中いろいろとお世話になった人々への挨拶などに二、三日が過ぎました。

将門は、阪東のあちこちに馬を走らせながら、阪東で父良将が残してくれた農地を守りながら生きていこうという決心を固めていきました。

ひとかたの整理がつくと、将門は自分の領地の農民たちと荒地の開墾に精をだす一方、京に出発するときおじの国香に管理を依頼しておいた土地の受け取りを進めていきました。すると、以前はたしかに自分の領地であったところが、前の常陸の大椽（だいじょう）（現在の知事）源護（みなもとのまもる）の領地になっているところがあることに気づきました。

「どうして、あの農地が源護殿のものになってしまったのだろう。」

不思議に思った将門は、古くから働いている使用人にたずねてみましたが、誰も知りません

でした。仕事の暇をみて常陸の国府（現在の県庁）にいつて調べてみましたが、やはりわかりませんでした。一日のつかれとはかどらなさから、館に帰っても気がはれませんでした。いまでも沈もうとする夕日を見つめながら、将門はじつと考えこんでしまいました。

いつの間にか日はとつぷりとくれ、あたりをまっくらに闇が包みましました。いつの間に帰ってきたのか弟の将頼が、

「兄じゃ、今母上から聞いてきたのですが、今日もわからなかったのだそうですね。」

将門は将頼の方に目をやると、

「うん、今日も調べがつかなかった。」  
と、力なくいいました。

「兄じゃ、おじの国香殿なら御存知なのではないでしょうか。」

「わたしも国香殿にたずねればわかるのではないかと思っていたところだ。明日さっそくたずねてみよう。」

王 明 動 不

と、将頼のことばにうなずきながら答えました。

「わかればよいのですがね。」

と母親も心配げにうなずきました。

それからしばらくして、夕食にかかりました。

将頼は口にごはんを運びながら、将門の方をじつと見つめていましたが、口に入れたごはんをぐつと飲み込むと、思い切ったように、

「兄じゃ、あした石田のおじ上のところに行くのなら、わたしも一緒につれていって下さい。」

と、いいました。

将門はごはんをかみくだきながらすこし考えていましたが、

「いや、土地のことについてたずねるだけだから、わたしひとりでよいだろう。」と答えました。

「兄じゃ、国香殿は腹の黒いお人ですから気をつけて下さい。」と、いかにも残念そうにいいました。

しばらくの間、沈黙が続きました。しそくがゆらゆらとゆれながら燃えていました。

次の日の朝、数人の従者をつれて、将門は石田の国香の館に向いました。

空は真青に晴れ渡っていましたが、ほおをなでる風はひやりとして、身をすくませました。林や畑の中をくねくねと曲りくねって続く道には、凍りついた土をもちあげて霜柱が立ちならんでいました。馬が、ガサ、ガサ、ガサ、ガサと霜柱をふみ倒しながら霜で真白におおわれた田や畑や林の中の道を進みました。

将門は、太陽が高く登り、ひんやりと冷い空気の流れのゆるむのをみはからって、馬にひとむち入れました。

馬をとばすほどに筑波の山がどんどん近づいてきました。前方に小貝川の流れがキラキラと輝いていました。小貝川の河原には子どもたちの背丈ほどもある枯れたあしの葉が水辺のあちこちに立っていました。

しばらくすると、国香の館が見えてきました。国香の館は、筑波山ろくの西の高台にありま

した。

将門の一行が国香の館の門前についた時、館の門前には召使いが二、三人集まって立話をしていました。召使いは達将門の一行に気づくと、話をやめて近づいてき、将門の馬の手づなを取り、

「どうもしばらくでございます。」

と、深々と頭をさげて挨拶をしました。

館の中の馬止めに馬をつなぐと、召使いは急いで将門がきたことを主人に伝えるにきました。国香は筑波嶺をあおぎながら、物思いにふけていました。召使いから将門が訪れたことを聞くと、いすまいをただしながら、

「奥の間に通しなさい。」

と、きんちょうした表情で命じました。将門が通された奥の間でしばらく待っていると、国香がさもなつかしそうな表情をつくりながら入ってきました。

「しばらくこなかつたじゃないか。」

と、国香はにこにこしながらいいました。

ひととおりの挨拶をすますと、将門は、土地の話を切りだしました。

すると、国香はそのままににこにこしていた顔を急にこわばらせて、だまつてしまいました。高い樹木に深く囲まれた館の庭先には、黒々とこけむした石と植木が立ちならんでいました。国香はそれらに目をやりながら、いかにもいいにくそうに、

「あの土地はな、良将が生きているうちに源護殿が良将からゆずり受けたものだ。」

と、答えました。

「父からそのようなことがあつたことをだれも聞いておりませんので、家のものはだれひとりとしてそんなことがあつたことを知りません。それで、その時のことをくわしくお聞き致したいのですが。」

と、問い返しました。

国香はしばらく考えていましたが、  
「そうか。それなら源護殿のところに行つて直接聞いてみればわしが話すよりよくわかるだろう。」

といつて、外出のしたくをするために席をはずしました。

将門は廊下に出て庭先に目をやりました。たくさんの古木が立ちならんだ庭園の木の間にぬつて、淡い桃色の筑波山がそびえ立つて見えました。

二人は数人の召使いと共に、大串の源護の館にでかけていきました。

一行が松林の中の小道を通りぬけると、水田の向うのこんもりと茂つた台地の一角に源護の館が見えてきました。

源護の館は、いくつもの建物が軒をならべて建ち並ぶ立派なものでした。

源護は、都での出世をあきらめて、常陸の国の役人として下つてきたひとりでした。源護は常陸大掾（現在の知事）として活躍中にたくさんの土地を手に入れ、その役職をつとめあげた後も京に帰らず、常陸の国に住みつきました。

この時代は今のように世の中のしくみがととのつていなかったことや、役人が自分の利益ば

かり考え政治にあまり熱心でなかつたので、人々の生活は貧しいものでした。毎日のように、争いが起こつたり、強盗団が横行したりしていました。

これらのものから生命や財産を守るために、一族の人々は団結したり武装したりしました。源護は、常陸の国に土着して安心して生活をしていくために、この土地で桓武天皇の子孫として尊敬を集め、強い力を持っている将門のおじの良兼や良文や国香の子ども貞盛に娘を嫁がせていました。そのため、将門のおじ国香、良兼、良文達と源護には強い結びつきができていました。

一行は馬を進めました。館をとりまくように広がる二月の田畑には、人の姿はありませんでした。

田には刈りとられた稲の切り株がうねうねとくねりながら遠くまで続いています。

館の門の中に入ると、源護が縁側のところに立っていました。護と護の長男の扶たすくがにこにこしながら出迎えました。

四人は部屋に入ると将門の都での生活の様子や将門の一族の人々の話など、いろいろと話し合いました。話のおりおりに護と国香の結びつきの強さを痛感し（土地の話聞きだすのは大へん難かしいな。）と思われました。一通りの話がすむと国香は、

「ああ、そうそう、今日うかがつたのはな、以前護殿が将門の父良将からゆずり受けた土地のことだな、何やら将門が聞きたいことがあるというので、うかがつたのだが。」と、いかにも一族の長者らしく、ゆつたりとした口調でいいました。護は今まで作っていた微笑を急に消して「あの土地は、いま国香殿のおっしゃつた通り、良将殿より生前ゆずり受けたものだが何かご



ふしんのことでもあるのかを。

と、将門の方をきびしい表情で見すえました。

「はい。そのことにつきましても母や古くから仕えている召使の者にも聞いてみたのですが、母や召使いの者は、だれもそのことを知らないと申しますので、くわしくお聞きいたしたいと思ひましてうかがったのですが。」

と、将門はいいました。

「あの土地は、良将殿がなくなるすこし前、国香殿に入ってもらって、ゆずり受けたもので、そのことについては国香殿もよくごんじじや。」

と、国香に応援を求めるように国香の顔を見ながらいいました。

国香は、ほほえみかけながら、

「将門、護殿のいうとおりなのだ。あの土地は、良将が死ぬ少し前、護殿がゆずり受けたのだ。」

と、静かにさとすようにいいました。将門は、すこしの間なにごとかを考えていましたが、

「父はあのように急死してしまいましたものですから、家族の者は後のことがどうなっているのかさっぱりわからないで困っています。それで、その時の証文のようなものでもありましたら、お見せ願ひたいのですが。」

と、きんちようしたおももちでいいました。

護は、

「証文は、その時平氏の長者国香殿に入ってもらったので、とくに書かなかったのでない。」と、語気を荒立てていいました。

土地の話になると、父親のかたわらでだまつて聞いていた扶が、いかにも腹立だしげに、

「将門殿は、父が将門殿の土地を横取りしたとも思っているのですか。」

と、くつつかかりました。

色白の扶の顔はこうふんして真赤になつてしまいました。

将門は、

「そのようには申ししておりません。ただわからなかつたことをおたずねしただけです。」と、いい返しました。

国香は、ただならぬ空気になりつつあることを感じとり、

「まあまあ、このことについてはよく調べてみればすぐわかることであるからな。将門の家人の中にも知っている人がいるかもしれない。後日、もう一度ゆつくりと話し合うことにしよう。」と、話を打ち切りました。

将門は、帰りの馬上で、十数年前、将門が京の都に上るときに、家人が国香に管理を依頼した土地を返してくれないのだという確信を強めました。

冬があけて、春がきました。

筑波山の後方に筑波山をとりかこむように立ち並ぶ小さな山々が、白くかすんで見えるころになると、急に田畑の仕事がいそがしくなりました。

その後、田植などの農事がいそがしさにおわれて、源護との土地の話はそのままになっていきました。

将門は、ひまをみては、国府（現在の県庁）などについて土地の台帳などを調べたり、その

ことについて知っているとと思われる人々を訪ね歩いて聞いてみましたが、何もわかりませんでした。

その間に稲の刈り取りが終わり、農事が一段落しました。

年があけて承平五年（九三五年）、冬期は、農業が生産の中心であったこの時代の人々には比較的ひまの多い時期でした。

将門は久しぶりに、妻の実家を訪ねてみようと思いました。召使いの者に都合を聞かせにいかせると（在宅であるから、ぜひおいでください。お待ちしております。）と、こころよい返事が返ってきました。

将門は、明朝早速訪ねて行くことにしました。弟の将頼は大へん心配しました。

「兄者、源護殿とはあれ以来来りまうまいっていません。父上のところに行くのには、源護殿の領地の近くを通らなければなりません。何か悪いことが起こりそうな予感がしますから、行かない方がよいのではないでしょうか。」

と、強く訴えるように将門を見つめながらいいました。

将門は腕を組みながらだまって聞いていましたが、

「将頼、心配しなくてもだいじょうぶだ。父も源護殿と土地の問題で何かいさかひがあったと聞いているので、一度うかがって話を聞きたいと思つていたところなので、丁度よい機会なのだ。」と、にこにこ笑いながら自信に満ちあふれた態度でいいました。

そばで聞いていた将平も、

「兄者、行くなら腕の立つ人達をたくさんつれていって下さい。もしものことがあつたら大へんですから。用心するにこしたことはありません。」

と、いかにも不安を押しかくすことができないうりように、いいました。

「うん。そうしよう。将頼、腕の立つ人々を二十人ほど集めておいてくれ。」と、将門は将頼にたのみました。

このころになると鬼怒川、小貝川の沿岸の荒地の開拓も進み、領地も増え、一緒に開拓にあつた農民との結びつきも強まっていましたので、くつきよりの農民がすぐに集まりました。

翌日は、朝から晴れ渡つた大へんよい天気でした。将門の一行は、朝早く豊田の館を発ち、大国玉の妻の実家に向いました。

途中、心配されたようなこともなく、妻の実家、平真樹の館につきました。

平真樹の館から眺める冬の筑波山は、落葉樹は葉を落としてかげをひそめ、常緑樹の黒い緑が、筑波山を冬の寒さから守るぞとばかりに山肌をおおっていました。

将門の一行は、帰りのことを考えて正午ごろ平真樹の館を出ました。

一行が野本の原野にさしかかった時のことです。前方の雑木林の中から、百騎あまりの騎馬の一隊が突然現われました。

一隊は、旗をなびかせ、かねをうち、将門の一行にむかつてきます。

一隊は、矢が将門の一行にとどく程のところまで近づくと、馬を止めました。

将門も馬を止めて身がまえました。ほおが緊張のために固くひきしまりました。

将門は、騎馬隊が立ち止まつたのを見ると、大きな声をはりあげて、

「わたしは豊田の平小次郎将門だが、何か用でもあるのか。」  
と、どなりました。

すると、一隊の中で特に立派なよろいかぶとに身を包んだ若者が、  
「わたしは源護の息子、扶だ。」  
と、どなりかえしてきました。

名のり合いがおわるかおわらないうちに、なん本かの矢がとんできました。

将門は、左手にみえる赤松林を弓で指し、

「あの林の前に陣を張れ。」

と、命令を発し、馬首を返し、一目散に松林をめがけて走りだしました。

一行は、馬の背に身をふせ、脱兎のごとく走り去る将門の後に続きました。

不 動 明 王  
これを見て、扶の一隊は、

「おり。」

と、かちどきの声を上げて将門の一隊を追いかけました。

馬上の人々の髪の毛や狩衣がはげしくなびきました。耳もとを追い上げる扶の騎馬隊の放つ矢がうなりをあげて飛んでいきました。

「走れ、ここで追いつかれては、全員命がないぞ。」

と、将門は必死の形相で叫びました。

腕よりの人々を選んできた将門の隊の行動は、機敏で整然としていました。いち早く、赤松林の前に到着するや否や赤松林の中に馬をかくし、陣を敷きました。

陣を敷くと同時に、弓に矢をつがえて追いかけてくる扶の一隊めがけて射放ちました。

風上に陣取った将門隊の矢は、順風にのって速度を増し、次々に追手に命中しました。

馬上から風上に射つ扶隊の矢は、将門隊の陣地までとどきません。扶は、次々に射落とされていく味方の人々を見て動揺しました。

一隊を止めて対陣しました。これ以上近づくのは、危険だと思ったからです。

しばらくの間、対陣したまま沈黙が続きました。扶の一隊は、風下から弓矢で戦うことの不利をさと、隊を三隊に分けて将門の隊をとり囲むようにして、その陣をせばめてきました。

王 選 び ぬ いて きた 人 々 の 一 隊 だ と は い っ て も 、 多 勢 に 無 勢 、 ひ し ひ し と 危 険 が 近 づ い て き ま し た 。  
た 。

不 動 明 王  
扶の一隊も、将門隊の強さを追い上げながら、まざまざと見せつけられたばかりなので、用心して急には攻めてはいきません。じりじりと将門の陣地を取り囲む輪をせばめていきます。将門もこのままでは敗れてしまうと考えました。

ちょうどその時です。

右手の林の蔭から、馬を走らせてくる一隊がありました。それは、将門の急を聞いてかけつけた平真樹のひきいる一隊でした。将門の陣は勇みたちました。扶の陣は、動揺し、みるみるうちに乱れていきました。

突然の加勢におどろいた扶、隆、繁の三兄弟は、陣を解いて逃げだしました。将門達は、勇み励んで追いかけました。精鋭ぞろいです。次から次へと追いつき、打ち取っていきました。この戦いで、源護の三人の息子扶、隆、繁は戦死してしまいました。

不意打ちをくらい、あやうく命をおとしそうになつた将門は大へん怒りました。豊田の館に帰ると、さっそく兵を集め、戦さの準備にかかりました。源護や三人の息子の後には、必ず国香や良兼がついている。ぐずぐずしていると、こちらが攻めほろぼされてしまうと思つたからです。

戦さの準備がとこのうと、将門は兵をひきいて、将門を攻めるのに味方した人々が住んでいる野本、石田、大串、取木などの村々をおそい、冢々に火をはなち、一軒残らず焼き払つてしまいました。その日一日中、煙は村々をおおい、この戦いで、負傷した国香はこれがもとで死んでしまいました。

この後、国香の弟たちが何度か将門を攻めました。将門に打ち負かされてしまいました。

戦さに負け、三人の息子を戦死させてしまつた源護は、戦さでは勝ち目がないと考え、将門と、平真樹を京都の朝廷に訴えました。

訴えをうけた朝廷は、訴えを出した源護と訴えられた将門、平真樹を呼び出し裁判をするこ  
とになりました。

朝廷から、このたびの争いについて裁判をするから出頭せよ、と、将門のところに国府の役人から通知があつたのは、承平六年九月七日のことでした。稻の穫り入れの時期がせまり、将門は大へんいそがしい毎日を送っていました。この知らせを受け取ると、冢族の人々は、大へん心配しました。将門は、日焼けしたたくましい顔面一杯に笑いをみせながら、  
「この度の戦さは、相手方がしかけ、こちらは防戦だけのものであつたのだから、すこしも心

配することはなす。」

と、自信に満ちあふれた態度でいいました。冢族の人達も、召使いの人達も将門の自信にあふれた言葉を聞いて安心しました。

将門の母親は、腹立たしげに、

「そうですとも、自分が戦さをしかけておいて、戦さに負けたからといつて、朝廷に訴えるなんて法がありますか。」

と、いいました。

心配して集まつてきた人達も、固くこわばつた顔をほころばせながら、

「ほんとうに、そうですよ。」

と合いずちを打ちました。

その翌日から将門は京都に行くための準備にとりかかりました。

このころ、朝廷で政治にたずさわっていた人々は、自分の出世のことや利益のことばかり考  
えている人が多く、政治のことを真剣に考えていなかったたので、裁判も長くかかることが予想  
されました。そのために、生活用品の準備や従者の選択などにいそがしい日々が続きました。

京都へついでからの住む家をさがし、整えておくために、何人かの召使いが先に出発しまし  
た。

将門の一行が豊田の館を出発したのは、それから二週間ばかりたつた十月十七日のことでした。その日は、朝から真青に晴れ渡つた絶好の旅行の日よりでした。

こがね色に輝く稲穂の上を吹き渡つてくる風が、一行のほおをかすめて通りすぎていきまし

た。人々は、ひんやりした秋風をほおに受け大へんすがすがしく感じ、心を明るくしました。一行の中にかにもたくましくその青年が、すみずみまで晴れ渡った空を見渡し、「これは絶好の旅日よりだ。幸さきがよいぞ。裁判は勝つこと間違いなしだ。」と、はればれた表情で声高にいいました。人々もそのように感じていましたので、一行はドッとわきました。

裁判は将門の言い分が通って、将門側の勝ちとなりました。裁判が将門側の勝ちとなった結果、少人数で多数の敵を破ったという武勇が、京都でも大へんな評判になりました。

将門の評判がよくなったということは、その対戦者源護側の評判が悪くなったということですから。源護から裁判で敗けたとの知らせを受けた良兼は、大へんくやしがりそのうらみをはらうと考えました。国香が死亡してからは、国香の次弟の良兼が敵側の中心となって働いていました。

裁判が終わって、双方がそれぞれの本拠地に帰りつくと、そのうらみをはらそうとする戦いは、ますますはげしくなりました。

将門は、豊田では羽鳥の良兼の館から近く、敵の攻撃が防ぎにくいと考え、意を決して館を石井（現在の岩井）に移しました。

また、都から持ち帰り、館の中に安置し守り本尊としていた不動明王像を結城の戸畑に堂を建てて安置しました。その近くに武勇の勝れた坂田蔵人ら数人の者をひそかに住ませ、これを守らせました。

戸畑はこの頃、下野（現在の栃木県）、真壁、下妻、岩井に通ずる街道の交叉点<sup>こうさてん</sup>として交通の要衝の地になっていました。

敵方を攻めるにも、敵の攻撃を防ぐにも、この地点は大切な働きをするわけです。将門は、この地点に武勇のすぐれたものを置くことよって、敵の動きをいち早く察知し、守りや攻めの態勢をととのえようと考えたのです。

このお堂の近くに大きな白い瓦をしきつめた結城寺が建っていました。不動明王堂は、結城寺とともに付近の人々の信仰を集めました。

将門の岩井転居で、将門側の様子を知りにくくなった良兼は、将門の召使いで炭集めをしている子春丸という青年が、良兼の館の近くまで来ていることを知り、子春丸をとらえさせました。

子春丸は、良兼の前に引き出されると、恐怖のために、ふるえがとまりませんでした。良兼の顔を見ると子春丸は、

「わっしは、何も悪いことはしておりません。どうぞ命ばかりはお助け下さい。」と、泣き叫ぶように、声をはりあげていいました。良兼は子春丸をしばらくの間、じつと見つめていました。

「子春丸、お前を炭集めではなく、わたしの家で馬に乗ってあるけるような身分の高い家来にしてやろう。」  
「いいました。」

子春丸は両手を後手に縄でしばられて、地面に坐らされ、不安と苦痛で真青な顔をしていま

したが、良兼のおもいがけない話にしばらくきよとんとしていました。  
良兼は、話を続けました。

「近い中に将門の館に夜討ちをかけたかと思ひのだが、館の様子がわからない。そこで、お前に力をかしてもらいたいのだが。」

子春丸は、またもとのように真青な顔に変わってしまいました。

「御主人様、そんなことはできません。」

と、不安におののきながら、必死の形相で答えました。良兼は予期していたらしく、平然と子春丸を見すえ、

「子春丸、よいか。こんな大切な話を打ちあけたのだ。もしことわるようなことがあつたら、お前を生かして帰すわけにはいかないのだ。」

と、いいました。

子春丸はガタガタとふるえながら、

「へえ。」

と、力なく答えました。

「よいな。」

「へえ。」

と、同じ答えを二度くりかえしてから、

「お馬に乗つてあるける冢来に本當にしてくるのではありませんね。」

と、うわ目づかいに良兼を見上げながらいきました。

「だいじょうぶだ。」

と、良兼はことがなつたことに気をよくして力づよく答えました。

翌日、子春丸は集めておいた炭を荷車につんで、良兼の冢来に後を押させ、将門の館の門の所に近づきました。館の門を入ろうとすると、門番は荷車の後を押している見なれぬ男に気づき、

「子春丸、後の男は誰だ。」

と、おうへいにたずねました。

「へえ、今日は炭がたくさん集まったので、隣の九兵衛に後押しをたのんできました。」と、つつかえつつかえ答えました。門番は、それ以上はたずねませんでした。

良兼の冢来は、無事に将門の館の中に入ることができました。

炭を炭小屋におろし終わると、子春丸はなに気ないふうを装って、館内を案内しました。このことに、将門の家人は誰も気づきませんでした。

良兼は子春丸に案内させて、将門の館の中の様子を調べさせた冢来の報告で、館の様子を知りました。

館の中に七、八名の冢来しかいないことを知った良兼は、その夜のうちに夜討ちをかけることにきめました。良兼は、八十名のくつきょうの冢来を選び、夜蔭に乗じて岩井に向つて出発しました。

結城の戸畑の十字路を過ぎ、大木の部落にさしかかったとき、木かげの中でひとりの男が良

兼の一行の様子をうかがっていました。

良兼の一行はそれに気づかずに通り過ぎていきました。くらやみの木かげの中から出て、一行にまじった男は人々の話から将門の館に夜討ちをかけにいく良兼一行であることを察知しました。

一行が山川沼が大木の部落まで入り込んだところにかかっている、かも橋を渡るのを確かめると、近道を通って、将門の館に一目散に馬をとばしました。

「一大事。一大事。」

と、けたたましい叫び声と、荒々しく門の木戸をたたく音に、将門や家来の者はがばつと起きあがり、刀や弓を持って門のところ走りよりました。

将門は、戸畑の不動明王のお堂の近くに住まわせておいた家来からの突然の知らせに、驚きました。敵は八十人ぐらいの人数です。

将門の館に泊っていた家来は、八人という少ない人数です。将門は、至急兵士を集めようと思いましたが間に合いません。将門は、館に住む女や子どもを一室に集め、

「戦いが終わるまで、絶対に部屋を出てはいけない。」  
と、強く命じました。

家来には武器をつけさせ、館を囲む塀や物見の上にかくれさせました。

それからしばらくの時間が流れました。

暗闇の中で良兼の一行が館に近づく気配を感じとりました。家来達は一瞬緊張して、弓に矢をつがえて、攻撃の合図がおりるのを待ちました。

良兼の一行は、将門の館の前になると、かねてからの手はずの通り、二隊に別れ、一隊は北の入口の方に、他の一隊は南の入り口に向かおうとしました。

その時です。突然、暗闇の中からうなりを発して、次から次へと矢が飛んできました。矢は馬上の兵士の何人かの者にあたりました。

「ウワー。」

と、いう悲鳴とともに落馬しました。次から次へと飛んできる矢は、何匹かの馬にも当たりました。

「ヒヒヒヒヒヒン。」

と、するどいな鳴きを発し、とびはねる馬、驚いて走り出す馬がありました。

良兼の一行は不意を襲おうとして、油断をしていたところ、不意に攻撃をかけられて、大混乱におちいりました。暗闇の中から飛んでくる矢に恐怖が更に増してきました。馬を返して逃げだす者も出てきました。

こうなつては、もう、良兼としてもどうしようもありません。良兼はおもいがけない突然の襲撃に、混乱した一隊の指揮をとりかねて、

「返せ。」

と、命令を発し、馬に鞭むちを入れました。一隊はわれがちにと、もときた道をもどりました。

将門は、良兼の一行が大混乱をしながら逃げだしたのを見ると、家来達に、  
「逃がすな。追え。」

と、命令するが早いか、馬にまたがり走りだしました。

将門側は、一目散に逃げていく敵の兵士に追いつくごとに、切り落としていきました。戦いが起こったことを知って、附近に住む農民達も身じたくを整えて加わってきましたので、将門側の兵士はどんどん増えてきました。

この戦いで、良兼側は約半数の四十人近い兵士が打ちとられてしまいました。

翌朝、落馬の際、骨折して動けなくなっていた敵の兵士をとらえて、昨夜の夜襲について白状させました。

とらえられた兵士は、八十数人で来たこと、将門の家来の子春丸の案内で館の様子をさぐったことなどを話しました。

将門は子春丸の手助けで襲撃をしたことを知ると、烈火のごとく子春丸に怒りを感じました。すぐに子春丸を捕えるように部下の兵士に命じました。

子春丸は一月程後、石田の親せきの家にかくれていたところを捕えられました。捕えられた子春丸は、石田の南の端におい茂る赤松林の斜面の一角で首を打たれてしまいました。

この戦いに敗れた良兼は、敗戦のショックと病気が合いまつて、次の年の六月に死んでしまいました。良兼が病死した後、将門は時の勢いに乗じて、常陸の国の国府（現在の石岡市）、下野の国府（現在の栃木県国分寺町）、武蔵の国（埼玉県）相模の国（神奈川県）にも攻め入り、自分の領地としてしまいました。

天慶二年（九三九年）十二月十五日、これらの領地を新しい国として、将門が治めることにしました。

諸国に役人を置き将門も新皇という役につきました。新しい政治をする館の建築も始まりました。新しい国の政治も順調に進み、政治をとる館の建設も着々と進んでいきました。

新皇としての職務は今まで経験したことのない新しい仕事ばかりなので、将門は大へん疲れを感じました。館に帰って床につくと、死んだようにぐっすり眠りこんでしまう毎日でした。

ある夜のことです。

将門の夢の中に、将門が守り本尊としておまつりしている不動明王が現われました。

不動明王は、真赤に燃えさかる炎の中で右手に剣を、左手に繩を持ち静かにたん座していました。

やがて立ちあがると将門の近くに歩みより、カッと見開いた眼で、将門をじつと見つめていました。

しばらくして、不動明王は静かな口調で将門に話しかけました。

「将門よ、わたしはおまえの守り本尊の不動明王だ。おまえは、天に太陽がひとつしかないことを知っているであろう。それと同じく、日本の国には、天皇はひとりしかないのだ。

今、日本の国は、天皇が治めている。それなのに、おまえは新しい国を作って新皇となり、新しい国を治めはじめた。天皇に逆らうことは、天に向ってつばをはくようなものだ。天に向ってはいったつばは、また落ちてきておまえの顔にかかり、おまえの顔を汚してしまいうだろう。それと同じように、天皇に逆らうとおまえは反逆者という悪名をきせられてしまいうのだ。すぐに、自分が新皇として新しい国を治めていくのだというような考えはすてなさい。そし



て、天皇をお助けするようにしなさい。おまえがそうするなら、おまえの子どもや孫の代までよいことが続くだろう。もしおまえが、わたしのいうことを聞かず、新皇として新しい国を治めていくことが続けば、天皇は、大軍を発しておまえを征伐にくるだろう。そうなった暁には、おまえがわたしを守り本尊としても、わたしは、おまえを救ってやることはできなくなってしまうのだ。」

話し終わった不動明王の両眼から血の涙がこぼれ落ちました。

将門は、不動明王の両眼から流れる血の涙を見たたん、はっとして目をさました。

将門は、あたりを見まわしましたが、そこには真暗闇が残っているだけで、不動明王の姿はどこにも見あたりませんでした。

将門の全身は、汗でぐっしょりとぬれていました。

しばらくの間、将門は暗い闇の中で眼を見開いたままじっとしていましたが、いつのまにか闇の中に吸い入ってしまった。

翌日、召使いの呼ぶ声に眼をさました時は、日はもうすでに高くのぼっていました。

身したくをととのえて、ひかえの間に出ていくと、政治をおこなうための役所づくりにあたっている興世王が待っていました。

興世王は、朝の挨拶をすませると、

「新皇さま、御気分でも悪いのですか。お顔の色がすぐれませんが。」

と、心配そうな顔をして問いかけてきました。

「ああ、連日の緊張ですこしつかれがでたらしいが、たいしたことはない。」

と答え、昨夜の夢のことについてはなにもいいませんでした。

しばらくの間、興世王は新しい役所の進み具合などを話して帰っていききました。興世王が帰った後、将門は、夢の中の不動明王の話を考えつづけました。

その間にも、新しい役所の建設は着々と進み、諸国に配置された役人からも、諸国での政務の進行の様子が次々と報告されてきました。ことがここまで運んでしまつたからには、今さらやめるわけにはいきません。

このような事の流れの中で将門は不動明王の話にひとつの結論をつけました。

「わたしも桓武天皇の五代の孫であるから、新皇になつて新しい国を治めてもおかしくはない。」  
というのがそれでした。

将門は、新しい国の建設にますます意欲を燃やして活動を続けました。

ところがある晩、また不動明王が夢の中にあらわれました。不動明王は、きびしい声で、「将門よ、よく聞け。わたしが右の手に持っている剣は、悪者を退じするためのものだ。左手に持つ繩はそれらのものを縛るためのものだ。また、わたしの後で燃えあがる真赤な炎は、人間の心の中に起る邪悪な考えを焼きつくしてしまつたためのものだ。」

将門よ、この前わたしがお話をしておいたことと反対の方向におまえの行動が進んでいるが、そのように進んでも幸せにはなれない。」  
と、大声で叱るようになっていました。

将門は、そくさに、

「わたしが守り本尊としてうやまつている不動明王さまなのですから、どうかわたしをお願い

を聞いてください。

わたしは、自分の幸のため新皇となり、新しい国を治めていこうとしていたのではありません。重い税金に苦しみ、貧しい生活をしている阪東の人々の豊かな生活を願っているのでございます。貧しい人々もそのために、わたし達と一緒に必死に戦っているのです。

ですから、わたしたちの望みがかないますよう、どうぞお力ぞえください。

不動明王さまが、わたしたちを見放し、どこかの国にお去りになつてしまつても、しかたがないと思います。」

と、目をさました。

初冬の冷い月の光が、ひとすじ将門の真暗な部屋の中にさしこんでいました。その夜、将門はねむることができませんでした。

不動明王

暗い天井の一点をいつまでもいつまでもみつめていました。

天慶三年一月、朝廷は、将門の乱をおさめるために藤原忠文を征夷大將軍に任命すると同時に、神社仏閣にはやくおさまるようにお祈りをさせました。

そのころ、朝廷では費用がかかりすぎるといふ理由で、常備の軍隊をもつていませんでした。藤原忠文は、兵隊を募りながら阪東に向つて東海道を下つてきました。

将門を捕えるか、斬るかしたものには、沢山のほうびを与えろといふ朝廷からのおふれが各地に下されていたので、一かく千金を夢みる人々が沢山応募してきました。朝廷のこのような動きを見取つて、将門の追捕の目を逃れるために、常陸の国を点々とかくれ住んでいた国香の

長男の貞盛は、下野の国の佐野に館をかまえ、強い力を持つていた藤原秀郷を訪問し、一しよに将門を征伐してくれるようにたのみました。秀郷も朝廷などの動きを読みとり、貞盛と協力して将門を討伐する決心をしました。

秀郷と貞盛は、話しが決まると翌日から、将門と戦うために領地にスパイを放して、将門側の動きをさぐらせました。

そんなことがあるとは夢にも知らぬ将門は、貞盛を捕えようと五千の兵をひきいて常陸の国の北部の地方をさがし回っていました。

王

ひるま江（現在の溜沼）のほとりで、貞盛の妻などを捕えることができましたが、貞盛の行くえは依然としてわかりませんでした。将門は、捕えた貞盛の妻などに高価な着物や、やすらぎの言葉を与えてやりました。将門のこのあたたかいはからいはいは、連日の戦さや、捜査で身心とも荒れ、疲れはてている兵士たちにやすらぎを与えました。

常陸北部地方の捜査をおわし、岩井の館にもどると、将門は兵士達を一時各々の家に帰しました。将門の館にはほんの少数の兵士だけしか残しませんでした。

秀郷が将門の領地内に放しておいたスパイは、そのことを秀郷に報告しました。秀郷は、スパイの報告を聞くと、おもだつた家来を集めました。そして、きびしい声で、

「天の時が来た。あす将門を攻める。ただちに出陣の準備をせよ。」  
と、命令を出しました。

命令を受けた家来は、出陣の知らせを持つて各地に馬を走らせました。いままでに、すでに出陣の準備が整えられていたので、準備完了の知らせが各方面から続々とどきました。

その間に、秀郷と貞盛は作戦会議を開き、周到な作戦をねりました。秀郷は、貞盛に、「将門の兵士は、長い間の貴殿の捜査でつかれている。その上、久しぶりに家に帰ったのであるから、気もゆるんでいる。家の仕事も山ほどたまっている。今ただちに攻め入れれば、すぐに集まってはこない。今攻めれば必ず勝つ。」と、力強い言葉を述べた。

紙燭に照らされた日焼けしたたくましい秀郷の体は、自信に満ちあふれていました。貞盛は、秀郷の力強く自信にあふれた姿に心強さを感じていました。

「将門も、秀郷殿が将門を攻めるなどということは、夢にも考えていないだろうから、油断をしている。それに、朝廷から将門討伐のおふれもでていることです。ですから、わが方の兵士達も勇み立つて違いありません。」と、心おどらせながらいきました。

不動明王

翌日、秀郷と貞盛は四千の兵をひきいて、岩井に向って出発しました。

この知らせを聞いて、将門は大へん驚きました。同じ阪東に住み、将門の館を訪ねたことのある秀郷が、いまままでさがし続けていた貞盛とともに、四千もの大軍を率いて、突然攻めてくるとは思わなかったからです。

将門は、一しゅん、顔面をそり白にし、いかりでかすかに両手をふるわせました。将門は、ただちに身じたくを整えると、館に残っていたいく人かの兵士に、「すぐに兵を集めよ。」と、厳しい声で命令しました。

不動明王

この時はもう、闘志にあふれたいつもの将門にもどっていました。

しかし、解散したばかりの兵士は、すぐには集まりませんでした。それでも何時間か後には、千人近くの兵士が集まってきました。敵は、四倍もの兵力です。しかも、将門を討つために、ひそかに訓練をし続けてきた兵士達です。

将門側は、初戦から苦戦になりました。勇かな将門の兵士達は、少数とはいいながらよく戦いました。

何日も、知恵と力をふりしぼつての戦いが続きました。将門の側にも、秀郷、貞盛側にも傷ついたり、死んだりした兵士がたくさんいました。いつの間にか、将門側の兵数は、四百人あまりになつていました。

天慶六年二月十四日。

この日は、季節風の大へん強い日でした。風は砂じんを吹きあげ、空を灰色にそめ上げました。

将門は、この北風を利用して、風上から矢をいかければ、少数の兵でも、大軍に勝てると思えました。味方の兵も、思うように集まらない。この機を逃がしては、もはや勝目がないと心に強くきざみました。

風上に陣をしいた将門は、意を決して突撃を開始しました。あんのじよう、強風に乗った矢は、速度を増して飛び、敵の兵士を次々にうち落としました。将門が、両眼をぎゅつとみ開き、口をへの字形に固く結んでつき進む様子は、将門が守り本尊としておまつりしている、不動明王

が将門に乗り移つたかと思われるほどのすさまじさがありました。

雲間からもれる太陽の光りが、将門のよろいかぶとにあたり、ちかちかと光りました。

将門側の優勢な戦いになりましたが、しばらくすると、逃げる秀郷、貞盛側を追い将門軍の位置が風下に変わってしまった。風の向きは、秀郷、貞盛側から将門側に吹き始めたのです。

秀郷、貞盛側は、勢力を盛り返しました。勢力を立て直した秀郷、貞盛側の兵士は、よろいかぶとに身をかためた将門をめがけて矢をいちはちました。雨あられのごとく将門のまわりには、矢が飛び散りました。このうちの一矢が将門のこめかみをいぬきました。兵士の先頭に立つて戦っていた将門は、ダツと落馬しました。

秀郷、貞盛軍は、将門が矢に当って落馬したのをみると、一斉に、

「ウオッ。ウオッ。」

と、勝どきの声をあげて、つき進んできました。

指揮者を失なつた将門側は、兵士の数の少なさも手伝つて、たちまち打ち破られ、生きのびたものは四方八方に、くもの子を散らすように逃げ去つていきました。

秀郷は、これを見て、

「ひとりも逃がさずに、うち取れ。」

と、大声を発しました。

将門の家来、坂田蔵人の一隊は、将門が戦死してしまつたからには、将門が常日頃、守り本尊としておまつりしていた不動明王をお守りするしかないと考えました。坂田蔵人の一隊は、

敵の囲みを打ち破り、八畑の不動明王をおまつりしてあるお堂に向かつて、馬をとばしました。

坂田蔵人の一隊は、不動明王を守つて山川の出城にこもりました。勝利の勢に乗つた敵の軍勢千五百余騎は、阿野小太郎を先頭に、坂田蔵人等を追つて、山川の出城に押し寄せて来ました。

坂田蔵人等数十名の兵士では、とても千五百余人の大軍と戦うことができません。坂田蔵人は、もはや我々の運命もこれまでと心に決めました。坂田蔵人は、最後の望みを託して不動明王に、

「不動明王様、押し寄せてきた敵をおはらい下さい。」

と、一心にお祈りしました。

他の兵士も、不動明王の前に坐してお祈りをはじめました。

山川の出城に勢ぞろいした敵の軍勢は、出城を取り囲み、いつきに攻め入ろうとしました。ちょうどその時です。

突然、黒雲が一面に空をおおい、大地をうす暗くし、大風とともに大雨が滝のように降り、そいできました。真黒な雲におおわれた空には、稲づまが走り、雷鳴が大地をふるわせました。風は、ますます強さを増し、出城のまわりを取り囲むように生え茂る木々をなぎ倒し、出城の建物をも吹き飛ばしました。

風は更に強さを増しました。

ビュー、ビュー、ビュー、ビューとすさまじいなり声をあげて吹きすさび、敵や味方の兵士の悲鳴をかきけし、大波の荒れくるう、山川沼の中に吹きとばしてしまいました。

あつという間に、坂田蔵人の兵士も、阿野小太郎の軍勢も、不動明王も、山川沼深く沈んでしまいました。

多くの兵士や不動明王をのみ込むと、沼は、またもとのように静まりかえり、さざなみが月の光りをはね返し、つめたく光っていました。

## 名 誉 市 民 齋 藤 茂 一 郎

結城市初の名誉市民、齋藤茂一郎氏は、明治十四年二月二十日、結城市大字小森、齋藤八郎平の二男として生まれました。齋藤家は、田川の橋の近くにあつて、回漕問屋をしていました。回漕問屋というのは、川の流れを利用して船で品物を各地へ運ぶ仕事の元締めをする家のことです。その頃は、田川も鬼怒川も水量が豊かで、一日に何そうもの船が、久保田河岸と田川の小森河岸から東京方面へ出かけて行きました。

広い屋敷、大きな家、忙しそりに働く大勢の使用人、荷物を積んでおくための土蔵など、齋藤家は裕福なことで有名でした。

広々とした田畑の続く関東平野の果てに、すつきりとそびえる名峰筑波。この紫の山を朝に夕に仰いで育った茂一郎少年の胸には、「あの山のように」という強い決意が芽生え、育っていたことでしょう。

絹川小学校を卒業した茂一郎少年は、中学校、高等学校、大学校時代を東京ですごしました。明治三十六年、慶応大学を卒業すると、仙台出身の某代議士の秘書になりました。代議士の夫人が小森にゆかりのある人でしたので、茂一郎青年はたいへんかわいがられたということです。

この時代が氏の出世の糸口になったともいわれています。ここで毎日、大勢の政治家と接し、世間の様相や世界の国々の様子、また、それに対処するための意見などを見聞しながら、時代

を見る豊かな識見しきけんを育てて行つたことでしょう。

大正十五年、その頃、日本は満州大陸（現在の中国大陸の一部）に大勢の人を送り、広大な土地の開拓かいたくと豊かな資源の開発に努力していました。

財界人として活躍しつづつあつた氏は、海外進出を決意し、「満州撫順株式会社南昌洋行しやう」を設立して、取締役社長に就任しゅうにんしました。撫順は、石炭の露天掘りろくで有名なところですから。この頃掘られた約一トンの直方体の無煙炭は、母校の絹川小学校に贈られ、現在も玄関に飾られています。

更に昭和十二年には、「満州棉花株式会社」設立。いずれも取締役社長に就任し、各事業に縦横の手腕を振るつて大いに「日本の齋藤」の名を高めました。それと同時に日本でも有数の財を成しました。

氏の身边には、いつも財界・政界のトップクラスの人達が集まっていました。親孝行な氏が、老母のために建てた小森の別荘には、このような人達がたびたび遊びに来たということですから。

バックナンバー「二二二」の立派な黒塗りの車が大通りから、すうつと曲がってくると、「あつ。齋藤別荘へお客さんだ。」と子ども達が走り寄つたそうです。

茂一郎氏の親孝行は有名です。多忙な中をたびたび車を走らせては、老母をなくさめにやつて来たり、歩行の不自由な老母を乳母車うはぐるまに乗せては、看護婦かんごふに押させて、近所の家々を訪問し、病身を老母を楽しませたのです。

また、たいへん郷土愛の強い人で、満州の氏の会社へは、結城から大勢の若者が雄飛ゆうひの志に

燃えて出かけて行きました。家にはいつも何人かの書生がいましたが、その人達の多くは結城出身の人達でした。満州事変・支那事変・世界第二次大戦中のけわしい時代にもよく郷土出身者の世話をしました。現在でも「齋藤社長には、めんどうをみてもらつた。」と、当時を振り返つて感謝のことばを口にする人も少なくありません。

昭和十六年、県立結城高等女学校（現在の結城二高）の校舎が、総工費二十二万円余で新築されました。氏は、「郷土の教育振興のためなら。」とその半額を惜し気もなく寄付しました。一つの学校の新築費の半額というのですから、現在にするとたいへんな金額だつたことがわかります。

この他、結城第一高等学校の現本館、結城小学校元保健室（東側にあつた一棟）元絹川村役場庁舎、絹川村忠魂碑（現在絹川小プール南側）などの建設にも多額の寄付をしました。

このように多方面に寄付をする人でしたが、無計画な先の見通しのない、自らの努力の見えてない事業には、けつして出資も寄付もしない人でした。満州進出も一時の思いつきではなく、少年の頃からの「脱日本」の志の実現に他ならなかつた氏には、他力本願の態度などがまんできなかつたのでしょう。

昭和二十年、日本の敗戦と共に満州での全財産を没収された氏は、身ひとつで日本へ帰つて来ました。

昭和二十六年、七十才の氏は、日本気化器製作所取締役社長に就任、さらに「結城商工会議所」初代会頭をつとめるなど、戦後の結城市のためにも目ざましい活躍をしました。

年老いた茂一郎氏は、郷里の人達をなつかしがり、幼友達がたまたまたずねたりすると、た

いそりよろこんで大いにもてなしてくれたそりです。でも、立場の違いもあって、人々が気楽にたずねてくれないことを淋しがって、知人にもらしたという事です。

毎年<sup>はつまつ</sup>初午には、地区内の年寄りひとりひとりに、フランネル一反に小遣いを添えて贈り、子ども達には、穴開<sup>あなあき</sup>銭に紅白のリボンを通したものを施したり、老人子どもには特別に思いやりがありました。

また、信仰心の厚い氏は、地元の氏神である「大桑神社」の神輿の飾りを寄進したり、他の神社の神殿の建築に際しても多くの援助をしています。

昭和三十二年十二月、地方文化・地方産業に貢献<sup>こうけん</sup>した氏は、結城市の偉傑として初の結城市名譽市民に推挙されました。市ではこれを記念し、茂一郎翁<sup>ちゆう</sup>の胸像を作つて業績をたたえました。輪郭<sup>りんかく</sup>も眉も鼻も口も大らかな中に切れ長な目は強さと共に緻密<sup>ちみつ</sup>な性格を語つて居ります。等身大木製のこの像は、現在、公民館に飾られています。

昭和三十三年二月二十三日、郷土を愛し、郷土に尽し、人々に「志を持つて強く生きる」とを示し続けた齋藤茂一郎氏は、多くの人々に惜しまれながら、七十七才で死去しました。

## ブローリーの星

夜空にまたたく星をながめてごらん下さい。何千何万、何千何億という星がキラキラと輝いています。

そのたくさん星の中から、新しい星を発見することは、なかなかみたいいことではできません。

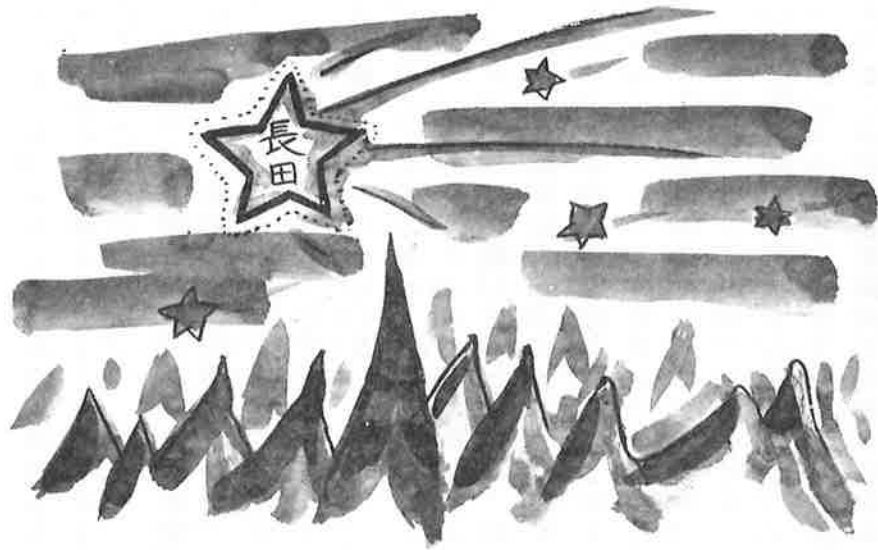
しかし、わたしたちの郷土の人「長田政二」は、そのなみたいていでない仕事をなすとげたのです。

彼は、明治十九年（一八八六年）六月十八日、茨城県結城郡絹川村久保田（今の結城市久保田）の農家の二男として生まれました。

子どものころから、自然に心をひかれ、ことに星については、強い関心をもっていました。

このことは晩年の彼が、

「わたしの父親も、空にはたいへん興味をもつ



ていました。わたしは、中学生時代から強く興味を持ちはじめ、いろいろな天文の本を読んだり、手製の望遠鏡などでよく研究したものです。」

その政二は、郷里の絹川小学校を卒業すると、上京し、明治三十六年（一九〇三年）東京の大成中学校を卒業しました。

その頃の彼は、天文に強い関心を持ち、さかんに夜空をながめては、星の観測かんそくをしました。明治四十年（一九〇七年）彼が二十二才のとき、そのころアメリカに住んでいた友人をたよって留学しようと決心しました。

向学心にもえる彼は、有名なあのカリフォルニア大学でぜひ学びたかったのです。

シアトルロスアンゼルスを経てアメリカへ渡った彼は、一心に勉学にはげみました。

しかし、一介いっかいの貧乏青年にとつて、めざすカリフォルニア大学の門は高ねの花だったのです。大学への進学を断念した彼は、広大なアメリカ大陸の土じょうに興味をもちはじめ、しだいに土じょうの研究にも打ちこむようになり、ブローリーの郊外にある帝国平原の牧場で働くかわら、土じょうの研究にはげみました。

いつぼう星の観測についても、なお、いつそこの努力が続けられました。

昭和六年（一九三一年）の七月七日、彼は故国日本のたなばたまつりを思い出しながら、一心に夜空の観測を続けていました。

すると、どうでしょう。レオ星座の近くに昨夜までは気がつかなかった新しい星らしいものが、ぼんやりと望遠鏡にうつるではありませんか。

彼は、半信半疑はんしんはんぎで自分の目を疑いました。そして、望遠鏡のレンズを何度もよくぬぐって、また、ながめました。すると、やはりレンズを通して星らしいかすかなあかりが見えます。しかも、よく見るとどうやら長い尾をひいているようです。

まちがいに「すい星」です。

彼は、その次の晩も、またその次の晩も一心に望遠鏡にしがみついては、新しい星を追跡ついせきしました。

数日後、彼は、アメリカマウントウィルソン天文台のシーアス教授に電報をうちました。たしかに自分の望遠鏡では、新星とみられたが、なにしろ小さな望遠鏡です。ぜひ天文台の大きな望遠鏡で確認してもらいたかったのです。

シーアス教授は、さっそく調べてみると、なるほど、レオ星座に新しいすい星が輝いていました。

彼は、ついに新しいすい星を発見したのです。

マウントウィルソン天文台では、新しい星を確認し、彼の功績を永久に記念すべく、そのすい星に「長田すい星」の名称を与えました。

その後も彼は熱心に星の研究にあたりましたが、昭和十三年（一九三八年）九月八日、カリフォルニア州ロサンゼルスのレストラン病院で、故国日本の大空をゆめみつつ五十二才のみじかい生がいを終わりました。



民話「ゆうき」調査・編集委員名

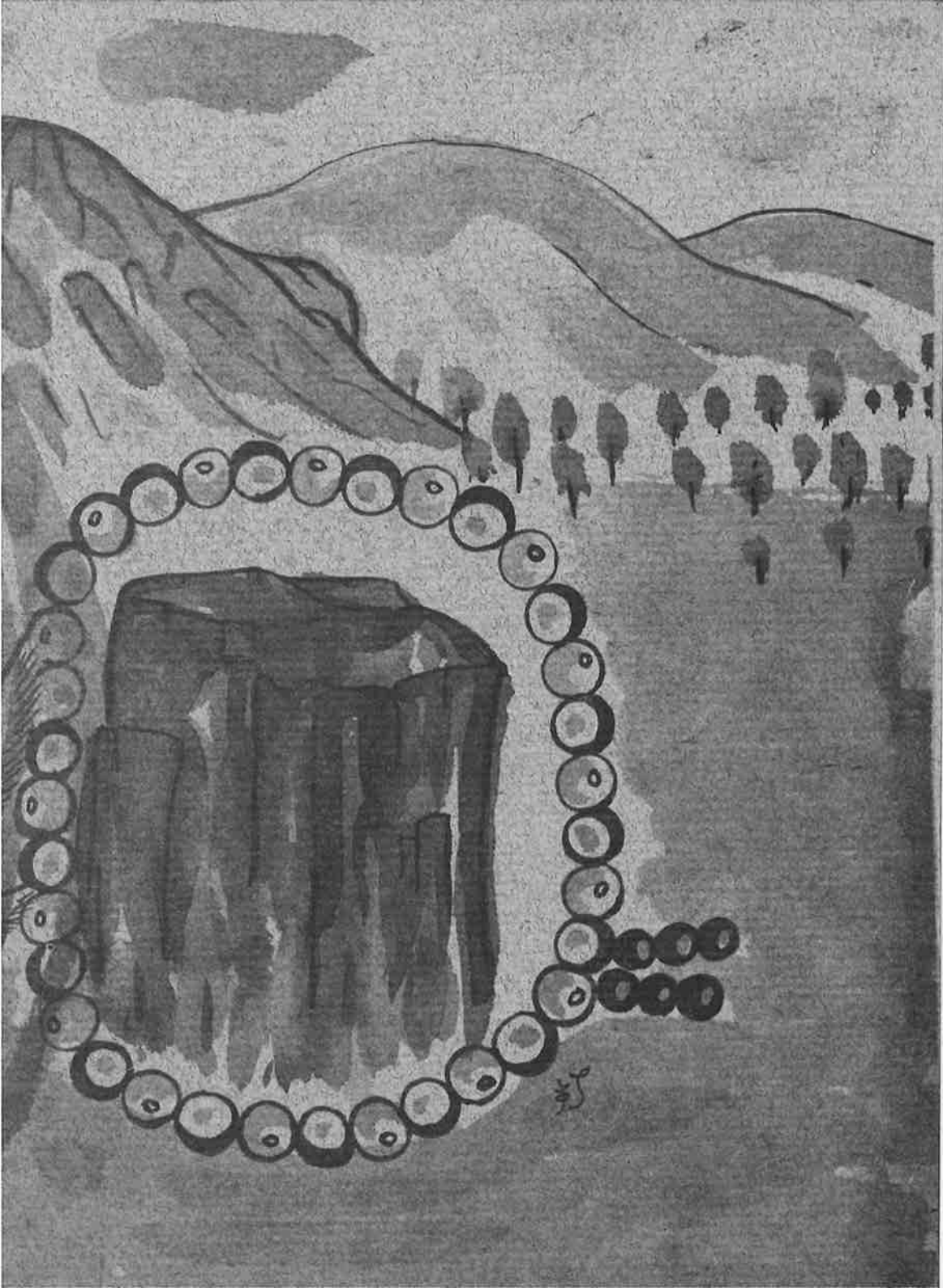
黒川邦三郎	染野健十郎	田中昭治	湯本治	野村周子	鈴木富彦	郡司道彦	松本キヨ	大吉和男	長瀬友一郎	鈴木木島照正	石島野照明	岡野守一郎	野沢忠彦	岩瀬水	玉水
中村三郎	船木信誠	大林信吾	黒須政勉	横井茂代	深谷茂	杉田祐一	飯泉俊夫	横井英夫	篠崎敏行	伊東健二	関沢福子	野口文冢	関見信一	鶴崎隆一	石崎

あとがき

「この地方に昔から言い伝えられている話や、結城にまつわる話などを集め、郷土理解を深め郷土愛を育てたい」との願いから、小中学校児童・生徒を通じて各家庭や近所の古老に呼びかけ、「お話」の収集↓採録↓文章化の作業を経て「民話ゆうき」と題するこの冊子が出来上がりました。

したがって収集の範囲も全市くまなくとはいかず、選択・編集に当たっても民話の定義に固執することなく小中学校児童・生徒の「郷土についての読み物」としての意味でまとめることといたしました。

さもあれ、この「民話ゆうき」の冊子を一つの出発点として市内にたくさんあるでありましたよう「お話」をもっと広範囲に発掘採録する活動が育ち、本当の意味での「民話ゆうき」として集大成できるよすがにでもなれば幸いです。



昭和五十三年三月十日 印刷  
昭和五十三年三月十五日 発行  
発行所 結城市教育委員会  
印刷所 清水印刷所